



日本よ、今、闘論！倒論！討論！2023 第823回

R5/9/8

壊滅に進む日本農業ー危機の食糧安保

パネリスト：

折本龍則（千葉県議会議員）

葛城奈海（ジャーナリスト・「防人と歩む会」会長

・「皇統（父系・男系）を守る国民連合の会」会長）

鈴木傾城（作家・アルファブロガー）

鈴木宣弘（東京大学大学院教授）※スカイプ出演

室伏謙一（室伏政策研究室代表・政策コンサルタント）

山田俊男（参議院議員）

山田正彦（元農林水産大臣・弁護士）

司会：水島総

\*\*\*\*\*

水島「皆さん、今晚は」

一同「今晚は」

水島「日本よ、今、鬪論！倒論！討論！2023第823回目の討論となります。今日は農業問題です。実は、私は本当に一番関心のあるのは、農業の事がずっと昔からベースにあるってことです。こういう問題は、人の命に一番関わっている。『食』っていうのがそうですしね。

もう一つは今日、ここにありますように『壊滅に進む日本農業 - 危機の食糧安保』という安全保障上の問題としても食糧がエネルギーベースとしても、もう4割を切っているというような状態で、極めて外国のものに頼らざるを得ないような状態になっている。

特に稲作そのもの自体も作物というより商品になってきているという感じしか見ていない。かつて、第一次安倍内閣の時は『瑞穂の国の資本主義』ということでね、瑞穂の国、瑞穂が一体、何処へ行っちゃったんだろうというような感じがあります。我々の国の農業全般は今、本当に危機の状態にあると思います。根本は国の危機になっていると思います。

そういう意味で今日は農業の現状と未来について、どうあるべきなのかっていうことを真面目にガッツとやってみたいと思います。では、ご出席の皆さんをご紹介します。まず、最初に元農林水産大臣で弁護士の山田正彦さんです。宜しくお願いします」

山田（正）「宜しくお願い致します」

水島「参議院議員の山田俊男さんです。宜しくお願いします」

山田（俊）「山田です」

水島「作家でアルファブロガーの鈴木傾城さんです。宜しくお願いします」

鈴木（傾）「お願いします」

水島「ジャーナリストで『防人と歩む会』会長、『皇統（父兄・男系）を守る国民連合の会』会長の葛城奈海さんです。宜しくお願いします」

葛城「宜しくお願い致します」

水島「室伏政策研究室代表、政策コンサルタントの室伏謙一さんです。宜しくお願いします」

室伏「宜しくお願い致します」

水島「千葉県議会議員の折本龍則さんです。宜しくお願いします」

折本「宜しくお願いします」

水島「そして、今日はスカイプの出演になります。東京大学大学院教授の鈴木宜弘さんです。宜しくお願いします」

鈴木（宜）「宜しくお願いします」

水島「はい。鈴木（宣）さんは前に、こちらにも最近出演戴いて、日本の農業の危機的な状況とか色々な問題をお話し戴いております。今日は、スカイプでご出演戴いております。はい。ということですがけれども、先程、冒頭に言ったようなことですがけれども、皆さんは今、日本の農業の現状をどういう形で受け取っておられるか、まず、きっかけとして、それぞれのお立場をお話し戴きたいんですがけれども、じゃあ、まず、山田さんから」

山田（正）「ああ、そうですね。今、おっしゃられたように食糧自給率が、例えば、私は、戦争中に生まれたので当時は配給制度があったんですね」

水島「はい」

山田（正）「あの当時も一人当たりのカロリーってというのが、カロリーベースで自給率っていうのは1230カロリーぐらいです」

水島「ああ」

山田（正）「それで今が980カロリーですから」

水島「ああ、下がっていますね」

山田（正）「今、戦争直後よりも非常に厳しい食糧状況にあるというのは間違いないです」

水島「なるほど、う～ん」

山田（正）「ですから本当は食糧自給率を、今度、食糧農業基本法、まあ、今度の改正で、どこまで本気で盛り込めるか。今、読んでいる限りでは、あまり、食糧自給率とか…それで自給率で大事なことは種なんですね。種が無いと蒔けないんです」

水島「はい」

山田（正）「それは今、野菜の種はF1の品種になってしまって…」

水島「そうですねえ」

山田（正）「一代限りで海外に依存しているという状況ですし…」

水島「う～ん」

山田（正）「米、麦、大豆の種子も種子法を廃止して、政府がF1の種子の『みつひかり』を奨励して回る」

水島「そうですね」

山田（正）「そんな中で、蒔いても一代限りだっという状況が本当にどんどん進んできている。だから実際には40%とか38%とか言っているけど、本当はそれよりもっといっているんじゃないかと」

水島「そうですね」

山田（正）「非常に厳しい状況にあるんじゃないかというのが、私どもの認識ですが…」

水島「そうですね」

山田（正）「はい」

水島「いやあ、だから安倍内閣は最初、『瑞穂の国の資本主義』って『瑞穂の国』という言い方をしていましたけど、種子法、種苗法ね」

山田（正）「そうです、種苗法」

水島「まあ、TPP、或いは物品のそういう協定とかね」

山田（正）「はい」

水島「悉く日本農業を苦しめるような状態、将来を潰すような状態を、まあ安倍内閣から始めているというね」

山田（正）「うん」

水島「具体的になったのはそこですからね。これが象徴しているっていうか、保守政権と自称していたのが現実には全く逆行したグローバリズム政策を進めてしまったっていうのがあって、これも、あとで、もし議論が出来たらね、この在り方そのものも、皆さんと話し合ってみたいと思います。では、山田（俊男）さん、お願いします」

山田（俊）「ああ、はい。山田正彦さんとは本当に久しぶりにお会いしまして」

山田（正）「そうですね」

山田（俊）「本当に、よくご指導戴いたし、大分、激しくやり取りしたり…」

山田（正）「最初、TPPに一人で反対したんですよ（笑）」

山田（俊）「大変でしたよね。今日、お会いできまして、いい顔色をされているし、健康でいいですね」

一同「（笑）」

山田（俊）「本当に有難うございます。それから、私は、水島さんとは前のこのグループって言いますかね、このグループと言ったって、皆さん、良く知っている訳じゃなくて、あのう、どういうグループだったのですかねえ」

水島「あの時は農協改革というテーマでやって、改革は色々改めなきゃいけないことがあるかもしれないけども、実は、そういう名の下に農協解体っていうかね、ある程度、そういう農民を保護するものとか、そういうのを潰してしまうんじゃないかと」

山田（俊）「うん、そうそう、そうそう」

水島「だから、そういうイメージがあつてね、今、現実にそういうところも、相当、あると思うんですよ」

山田（俊）「うん、はいはい、そう」

水島「だから、それと農業自体も本当にやせ細ってくるっていうことで話し合った時に、ご出演戴いたっていうことだったと思いますね」

山田（俊）「ああ、そうですか」

水島「でも残念ながらいい方向に行っていないと、私は思っているんですね」

山田（俊）「はい、行っていませんね」

水島「山田さんも、そう思われますか」

山田（俊）「ああ、思います、思います」

水島「う～ん…」

山田（俊）「ただ、あのう、あ、恐縮です。このグループって言ったら言葉が悪いんですけど、皆さんとの間で相当長い年数に渡って、お付き合いさせて戴いていた訳でありまして…」

水島「そうですね」

山田（俊）「しかし、そのことは殆ど忘れてしまっているんじゃないかと思うぐらい忘却の彼方にあるんですけども」

水島「うん。そうですねえ」

山田（俊）「私自身はそういう面では、しっかり色々な勉強をさせて戴いたという風に思っておりますまして感謝しています。今回、突然、こういうことで、おい、こんな動きがあるぞと、こうこう、こうで、どうだ、来て話をしろっていう風に言われて出して戴いた訳でありますから、相当…（笑）」

水島「やっぱり山田さんは農協の母体にね、当選なさってきたっていうこともあるから」

山田（俊）「はい」

水島「やっぱりねえ、自民党の議員さんだから言い難いこともあるかも分らんけど」

山田（俊）「はい、はい」

水島「ただ、やっぱり、日本の為でね、農協も、もうちょっと、こうあるべきだったとかね、じゃあ、これから、こう、あるべきだとかね」

山田（俊）「うんうん、うん」

水島「それから農業の在り方ね」

山田（俊）「うん」

水島「やっぱり、今迄の族議員というのは良い面もあったと思うんですよ」

山田（俊）「うん」

水島「知識があったって」

山田（俊）「うん」

水島「ところが、申し訳ないけど、私もそんなに全員を知っている訳じゃないけども、専門知識を持たない人達がほんとに多い」

山田（俊）「うん」

水島「残念ながら国会議員のレベルも下がっているんじゃないかという意味もあるんでね、また言える範囲内で頑張って貰おうということですね（笑）」

山田（俊）「はい。有難うございます。私自身は頭のとっぺんから足の爪先まで全部、農業と。それと、もうちょっと深く言うと農協ですね」

水島「はい」

山田（俊）「だから地域の中に於ける共同組織が、場合によったら、この資本主義の時代って言いますか、社会主義とは言わないにしても、この新しい時代を切り開いていく時に、共同の取り組みが必ずベースとして大きな役割を果たすというのが、私の存在で、だから全国農協中央会っていう農協に入っている訳で、人生の大半をそこで過ごしている訳でやっています。今回、こういう形で、水島さんと久しぶりにお会いして、ご役に賜って…」

山田（正）「山田（俊）先生とは全中の時代から…」

山田（俊）「そうですね。過激派の山田さん。山田正彦さんの方が過激派でしたね」

山田（正）「（笑）」

水島「はい」

山田（俊）「私は、ややもすると協同組織ですから保守派でね」

一同「（笑）」

水島「いやいや…」

山田（俊）「既存の組織を守らなきゃいかんという言い方ですから」

山田（正）「（笑）」

山田（俊）「かなり色々ね、はい」

水島「違ったと思いますけどね、だから、まあ、逆に良かったっていうかね」

山田（正）「はい」

水島「ただねえ、その守らなきゃいけない組織が今、ガタガタになっちゃっているんじゃないかっていうね」

山田（俊）「ああ、おっしゃる通りです」

水島「そういうところもあるんで、是非、言える範囲で過激になって戴いて」

山田（俊）「はい、そうですね」

水島「頑張っただけだと思います」

山田（俊）「はい、はい」

水島「宜しく申し上げます」

山田（俊）「はい、有難うございます」

水島「それと農民の平均年齢が60歳を超えているっていうねえ、これは凄いことでね、他の国は未だ下ですからね。農業を携わる平均年齢が60を超えて、確か65～66歳だったかなあ」

山田（俊）「だと思えますよ」

水島「だから本当に、そういうところも考えなきゃいけないですね。では鈴木傾城さん、じゃあ、お願いします」

鈴木（傾）「その農家の年齢が上がっているっていうことですけど、それで今、インターネットのSNSとかを見ると、食糧自給率は別に上げなくていいじゃんっていう声があるんですよ」

水島「おお～」

鈴木（傾）「むしろ食糧自給率を上げろっていうのはバカだって言うんですよ」

水島「ほお」

鈴木（傾）「何故かと言うと、日本が高齢化して農家も大変になって来ていると。作物を作れなくなってきている」

水島「うん」

鈴木（傾）「そうしたら外国から買えばいいじゃないって。何故、無理に日本で作らなきゃいけないのかっていう声が、何かインターネットの中で、それも文化人がそういうことを言い出しているんですよね」

水島「ああ」

鈴木（傾）「その米を外国から買えばいいじゃんっていうんですけど、日本の米ってジャポニカ米ですよ」

水島「うん」

鈴木（傾）「世界で食べられている米ってインディカ米ですよ」

水島「まあ、長粒米っていうのが多いです」

鈴木（傾）「長粒米ですよ。もし外国から買って来ればいいじゃんっていう話になると、じゃあ、日本のジャポニカ米をどんどん無くして、日本人もインディカ米を食べましょうねっていう話になってきますよね。要するに米は米でも全然、違う米ですよ」

水島「そうですね」

鈴木（傾）「全然、違う米ですけども、それが一切合切、無視して、日本で作れなかったら外国からもって来ればいいっていう話をしている、こういう短絡的な話をしているのかもしれないこともあったんですけど、突き詰めて言えば、こういうことをずっとやっていると、それこそ食糧自給率をどんどん下げたまま外国から買うような話で、ずっと進めていくと、要するに日本の文化って、ここでも消えていく可能性がありますよね」

水島「はい。そうですね」

鈴木（傾）「まあ、そういうのを無視して、今も買えばいいじゃんっていう声広がっているっていうことに凄い懸念を持っていて、もう少し考えて欲しいなあと思っております」

水島「丁度、典型的な例が20年以上前ですけど…」

鈴木（傾）「はい」

水島「あの平成維新の会を創った大前研一さん。あの人が堂々と言っていたんです。安くて旨い米が食えりゃあいいじゃないかと」

鈴木（傾）「ああ、そうですね」

水島「そうしたらオーストラリアとかアメリカには、広い土地があるから、そこに田んぼをつくって、日本の農民が行ってもいいけども、そこで、みんなで作って、安くあげて、それだけ日本に輸入させればいいたろうと、その時に戦争とか海上封鎖とか、そんなことは全く意識していない」

鈴木（傾）「そうです、全く意識していないですね」

水島「この能天気なね、その農業っていうものは…それと、もう一つは単なる食べ物だと思っている」

鈴木（傾）「ええええ」

水島「食糧というものの自体に関する哲学っていうかね、哲学とまで言わなくとも、食糧に対する意識が無いっていうね、こいつは駄目だと思ったけども、それが未だずう〜っと、維新の会まで含めて、今の日本にずうっと繋がっているっていうねえ」

鈴木（傾）「うん」

水島「もうねえ、その思想と言うか、自然観とか世界観的なものも含めて、ここまで来ちゃっているっていうねえ」

鈴木（傾）「ええ、ええ」

水島「おっしゃる通りなんですねえ。これも、あとで話題にしたいなと思いますねえ」

鈴木（傾）「はい」

水島「はい。では、葛城さん、お願いします」

葛城「はい。今の話に繋がるんですけども、やはりコロナ禍ですとかロシア・ウクライナ戦争で、私達は国境が閉じられた時にどうなるかっていうことを、ある程度、経験出来たはずなのに、それが生きていないなあっていうことに、私は凄く危機感を抱いています。

今、鈴木（傾）さんがおっしゃったように、米は外から買ってきてくりゃあいいじゃないっていうのも正にその典型で、私は、今こそ、もっと米を戦略的に沢山作って、普段は輸出するぐらいにして、いざという時には、それを国民の食糧として大切に食べさせて貰うって

いう風に切り替えていかなくちやいけないんじゃないかなあっていう風に思っているんですね。

鈴木宜弘先生がよくおっしゃっていることですけども、戦後、我々は何かパン食をしないといけないと。ご飯を食べたら頭が悪くなるとまで言われて、学校給食も私が小学校低学年の頃はパン食しかありませんでした」

水島「うん」

葛城「それが途中から段々米飯給食っていうのが出てきて、まあ、いい方向には、大きな流れで言うと、来てはいるんでしょうけれども、そうこうする内に、私達の嗜好っていうのがパンに慣れてしまって小麦粉に慣れてしまって、どんどん米から離れる方向になっていってしまいましたよね。なので、今、いきなりご飯を食べましょうって言っても、農水省とかも頑張っってキャンペーンをやっているみたいですけども、中々、米を、ご飯として食べるっていうことを増やすのは難しいんじゃないかなあと思います。

私自身も何だかんだ言いながら、パンも美味しいと思いますし、そんな中で、ここ数年、個人的に注目しているのが米粉ですね。私は毎朝、米粉パンというのを食べているんですけども凄く美味しいですよ。何か独特の米の風味もあるし、甘いし、旨味があるし、だから、やっぱり日本人として身体が喜んでいくなあっていう感覚があって、こういった従来の、所謂、ご飯としてのお米だけじゃなくて、小麦粉でこれまでやって来ちゃったことって実は米粉でも出来るんだよっていう価値観が広がると、少しいいのかな、いい方向に持っていけるようになるんじゃないかなあと思います。

先程来、水島さんもおっしゃっていましたが、丁度、今、稲刈りの時期で全国に出張なんか行くと、瑞穂が垂れている光景を見ることが出来て嬉しいなって思うんですけども、まあ、でもねえ、本来はもっともって田んぼがあって然るべきで、田んぼというのは単に食糧を提供してくれる場所だけではなくて、蛙を始め、色んな生き物達が息づいている生物多様性を守る場所でもあるし、自然のダムとも言われますよね。

今も台風で大雨が降っていますけども、こういった時、田んぼがあることによって、下流の村々町々が守られるっていう効果もありますし、何よりも私達の文化を育ててくれている象徴的な場所だと思うので、やっぱり休耕田は復活させて田んぼにして次の世代に受け継いでいく。その為には日本人が、もっと食べなくちやいけないけれども嗜好が変わってしまった今にあっては、米粉を普及させていくっていうのも一つの大切な手段として見直して行けたらいいなっていう風に思っていますね」

水島「そうですね」

葛城「あと農業と言うか、ちょっと広い視点になってしまうかもしれませんが、今日、FrontJapan 桜に『鯨のレストラン』を今、公開している八木景子監督に出て戴きました。八木さんも日本人の食というものに対して凄く問題意識を持っておられまして、前作は、ご承知の通り『Behind “the Cove”』ですね。日本が代々やって来た捕鯨というのが、残虐非道で野蛮な日本人がやっていることだっっていうような価値観が欧米によって蔓延させられてしまったことに対するアンチテーゼの映画を作って下さったんですけども、今日は、伝えたい事があり過ぎて前作では伝え切れなかった鯨の肉のおいしさを今回は伝えたかったということで、神田にある『一の谷』という鯨料理のお店のドキュメンタリーを次の第2作にされたんです」

水島「なるほど」

葛城「パンフレットの中にも、日本の肉の消費量が1962年の1位は鯨肉だったっていう風に書かれているんですね」

水島「そうですねえ」

葛城「はい。鶏肉、豚肉、牛肉って続いていたんですが、戦後の一時期、私達、日本人の貴重なたんぱく源として、我々を生かしてくれた、この鯨との付き合いをちゃんと見直していかないといけないんじゃないかなあと思います。せっかく数年前にIWC、国際捕鯨委員会を脱退したんですけれども、それによって何故か鯨の肉が、かつての様に流通することは無かったというか、現状、無いですよ」

水島「うん」

葛城「何故かと言うと、日本政府自身が軛を作って、手足を縛ってIWCに居た時以上に獲れないという制限を作ってしまった。これじゃあ、全く意味がないじゃないかってことを訴えておられて、そういったコオロギ食を言うんであれば…」

水島「うん、ほんとだよ」

葛城「日本人が元々食べていた鯨とか、まあ、あと、私は狩猟をやるんですけれども野生鳥獣肉、鹿とか猪の肉を食べるといことも復活させていくべきなんじゃないかと思っております」

水島「そうだよ。葛城さんは資格を持っているんで…」

山田（正）「私が子供の頃は、元々捕鯨をやっていましたからねえ」

葛城「あっ、そうですか」

山田（正）「それで、ちょっと大きくなって鯨カツとかね、鯨肉は主流でした」

葛城「うん」

水島「そうそう、そうそう」

葛城「ねえ。美味しいし、栄養もたっぷりだし」

水島「給食の御馳走だった」

葛城「あっ、そうですよ、竜田揚げとか、はい」

水島「カレーと鯨の竜田揚げっていうね」

葛城「はい」

水島「給食の中では一番の御馳走だったというかね」

葛城「はい」

水島「だから大体、昭和30年代ぐらいの給食ですから、あの不味い脱脂粉乳とパンとね、でも、それは一応、人気があって、ただ、本当に、皆さんご存じのように、これは私  
が本で読んだだけですけど、鯨が今、増え過ぎちゃって人類が食べる魚の量よりも…」

葛城「あっ、そうなんです」

水島「鯨が食べる…」

葛城「3～5倍、食べているんです」

水島「そうなんだね」

葛城「はい」

水島「だから漁獲量が減るっていうのは、鯨によるものでもあるんです。それと、鯨は頭  
がいいからとかそんなことを言うんだったら、牛や豚を食うのもやめろよって言いたくな  
るんだけどね」

葛城「はい」

水島「まあ、ちょっと、そういうことも含めて食糧の問題」

葛城「はい」

水島「鯨の問題っていうのは典型的に表れていますねえ」

葛城「うん」

水島「はい、有難うございます。では、室伏さん、お願いします」

室伏「はい。えーと、今、私がフリップを作って送ったのが遅かったので、今、手元に無  
いので読み上げる形で言うんですが、1987年に全農が作った映画で『怒りの大地』と  
いう映画があります。ドキュメンタリー映画です。これはNPO映像資料館っていう風な  
サイトで、これは誰でもご覧戴くことが出来るようになっていっていると思います。私も何回か  
観ました」

水島「『怒りの大地』ですね」

室伏「『怒りの大地』です。この映画の一番、最初に、どういうメッセージが出て来るか  
と  
言う『農業を軽んじる国家は、その民族の崩壊を招く、かつてローマが滅びたように』  
と出て来るんですね」

水島「うん、うん」

室伏「正に、このメッセージの通りだと思うんですよ」

水島「うん」

山田（正）「うん」

室伏「各国は、それを解っているから戦略的に食糧を確保しようとか、イギリスの自給  
率は日本ぐらい低かった訳ですけども、一生懸命、自給率を上げるということをやってき

た訳ですよ。それから自国で作っている食糧というのは、当然のことながら自国民に優先的に配分する訳ですよ。

ですから確か2008年か9年だと思いますけど、天候不順、干ばつがあって小麦の作柄が非常に悪かった時がありましたよね。あの時にアルゼンチンが真っ先に何をやったかと言うと、小麦の輸出禁止なんですよ。

水島「うん」

室伏「つまり、いくらお金を持っていたとしても、いくらお金を積んでも売ってくれない、食糧が買えないという状況が生まれ得るんですよ」

水島「うん」

室伏「実際、今、そうなりつつありますし…」

水島「うん、そうですね」

室伏「逆に言えば、その食糧というものを占めれば戦略物資として、相手国、まあ、戦っている国でも何でもいいんですけど、その国に対して言う事を聞かせることが出来ると」

水島「うんうん」

室伏「こういうことになってしまう訳ですよ。それも、みんな、解っているから何とかしようということを一生涯懸命、考えている。普通の国家だったら当たり前のことですよ。そもそも戦前まで食糧生産って物凄く重視をしてきましたし、江戸時代なんて言ったら、いかに食糧の生産を増やすか生産性をあげるかっていうことを一生涯懸命、やってきた訳じゃないですか。その為の環境として治山治水をやっていくと。当たり前ですよ。

だから、例えば、藩とかその土地に対して石高で、生産量で測ると。それも必ずしも正しくはなかったようではありますが、そういうことをやってきた訳でありますから、やはり食、何をおいても農業、何を言われても食糧っていうのは国の基であると」

水島「うん」

室伏「こう考えるのは当たり前だと思うんですが、残念ながら、今、日本では、皆さん、ご承知の通り、何か農業っていうものが軽んじられるとか、あとは農業に従事している人を見下すような風潮って、いまだにあると思うんですね」

水島「うん」

室伏「どうしても、そういう風な印象というか考え方って子供の頃からずっと刷り込まれてくるから、大人になっても自分では解っているんだけど中々抜けなかつたりもするところがあったりして、あの方々っていうのは、我々の為に食糧を作ってくれている非常に有難い方々なんですよ。

御百姓と言って大事にするとか、そういうことをしてきた訳じゃないですか。だから、何か食糧生産を軽んじる、先程、海外から買って来ればいいのかという馬鹿なことを言っている人が居ると」

水島「うん」

室伏「もう本当に馬鹿ですね。もうね」

水島「うん」

室伏「もう馬鹿以外に形容詞が見つからない、まあ、そういう方だと思いますね。うん、じゃあ、どうぞ、貴方は何処でも行って、お金を持って何処かへ行けばいいんじゃないですかと」

水島「うん」

室伏「その内、売ってくれなくなるよと。そういう緊張感とか危機感が無いと。あとは、ネットの場合、極端なことを言えば炎上するからっていうところもあると思うんですけど、それにしても言って良いことと悪いことがあるだろうという話だと思うんですけども、要は恐らく『いいね』が付くというか結構、いい高評価があるんだと思うんですよ」

水島「うん」

室伏「だから、その国民自体、多くの国民が食糧に対する危機感とか、もっと言えば安全保障に関する危機感とか危機意識っていうものが非常に薄いんだと思うんですよ」

水島「うん」

室伏「だって安全保障で戦う時、どうするんだとか考えれば、大東亜戦争の時に、一番の死因って、確か飢餓ですよ」

水島「うん」

室伏「食糧難。要するに戦いに於いて、食糧って最も重要なものと言っても過言ではないものじゃないですか。だからね、本当に、もう最初から絶望的な話ばかりになっちゃいますけど、日本は何かねえ、一事が万事だから、農業についてあまりにも考えなさ過ぎる。これ、もう一回、出しますけど、この農業を軽んじる国はというフリップですね。はい。これです」

水島「うん」

室伏「あまりにも今、正にメッセージのままになってきて、だから正に日本民族というものが崩壊の過程にあると言ってもいいような状況なのかなっていう風に思ってしまう訳ですよ」

水島「そうですね」

室伏「あとは個別の話として米の話とか鯨の話もありましたけど、私よりも、このあとの鈴木先生が詳しく解説して戴けるとは思いますけど、やっぱり穀物っていうのは絶対に食べる訳じゃないですか」

水島「うん」

室伏「小麦だって豆だって、絶対に食べますよ。だから絶対に必要な訳ですよ。日本民族というものは米を主食にしてきましたと」

水島「うん」

室伏「だから別に米をどんどん食べればいいんですけど、何故か米を食べることを悪く思うような、何か米イコール炭水化物と言ってダイエットには米を食べない方がいいって言うじゃないですか。あれも、僕は日本の米食、米作を崩壊させる為に誰かが言い始めた大嘘っぱちなんじゃないかと…」

葛城「あ、私もそう思っています」

室伏「ねえ」

葛城「はい」

室伏「むしろ正確に言うと、炭水化物をちゃんと食べないと筋肉が出来ないから、むしろ代謝が落ちて太り易くなるじゃないですか。だから、どう考えてもそうだろうなと。一時期、農水省が一生懸命、それをひっくり返そうとして、色々ファッション雑誌でキャンペーンやったんですけど、結局、あまり効かなかったですね。だから未だに農業は、米を食べるのは駄目だとかね、あと、田んぼのメタンガスが地球温暖化の原因になっているとかね」。

一同「(失笑)」

室伏「もう言っていることがメチャクチャじゃないですか」

水島「そうですね」

室伏「メチャクチャなことだから冷静に平衡感覚を持って考えれば、メチャクチャだし、あり得ない、おかしな話だろうって分かるんですけど、何故か鵜呑みにしちゃって、特に若い子達がそうですね。だから、それと、もう一つの原因としては、若い子も教育がね、馬鹿をいっぱい作るような教育をしてきたからとかもあると思うんですけど、そうなるよね、やっぱり我々がこういう話をね、今日も色々な議論になると思いますけど、その情報発信をしていって、やはり若い子から覚醒していってあげないと拙いよなと思うんですよね」

水島「そうですねえ」

室伏「だから、今日は、そんな議論が出来ればと思っています。もう一つフリップを作ったんで、それを話すと長くなるので、これは後でお話をしようと思っています」

水島「はい。そうですねえ。これは本当に食べ物をどう見るかっていうことなんですけど、さっき葛城さんが言ったように、私達は本当に経験しましたからね。『ご飯を食べると馬鹿になる』ね。『みんなでパンを食べましょう』っていう宣伝カーがうちの町内を回りましたからね。ずう〜っと回っていましたから。『米を食べると馬鹿になりますから、パンを食べましょう』っていうね、これもGHQの方針なんでしょうけどねえ」

室伏「この映画の中にも正にそれが出てきます」

水島「ああ、そう」

室伏「あと『イタチっこ』っていうよく分からない映画があって、農村部の子達は米ばかり食べているから身体が大きくなれないし、あまり頭が良くなれないと。都会の子達は、

パンを食べているから育って頭も良くなると。その内、農村部の親達が間違いを認めて、パン食になるというメチャクチャなアニメ映画ですけど」

水島「そうか（苦笑）」

室伏「それが、この中に出てきます（苦笑）」

水島「なるほどね。普通に栄養学的に言っても、米は大変優秀なものでね、ビタミンB類だけ除けば物凄く良質なたんぱく質で、みんな、いいことを言われているんですけどね。それ、おっしゃるように、ほんと伝わってないですよ。はい、では、折本さん、お願いします」

折本「どうも。私は今年4月の統一地方選挙で県会議員に初当選したんですけども、それまでは浦安で4年間、市議会議員をやっておりました。浦安は御存じのようにディズニーランドがある所ですが、市の面積の四分の三が埋め立て地にして、実は、漁業も農業も無い自治体です」

水島「ああ～、それは凄いですね」

折本「全国でも極めて珍しい自治体ですけども、昔は漁師町にして半農半漁でやっていたのですが色々な公害で漁業が出来なくなりまして、それで漁業権を放棄して埋め立てをして、新しい人達がいっぱい入って来たと。そういう自治体であります。

ですから、私は、これまで農業に携わったこともありませんし、はっきり言って、農業に関してはズブの素人な訳ですね。なので、本当に、先輩の皆さんの前で話すのは本当に釈迦に説法の話になってしまうんですが、ただ一つ言えるのは、浦安には漁業農業が無いですけども千葉県自体は全国屈指の農林水産県でありまして、例えば農業生産額で言うと全国第6位、あとは海面陸揚げの金額が全国第6位というところで、全国屈指の農林県であると。

そこで、じゃあ、浦安には農業がない、漁業もないから関係ないのかと言ったら決してそんなことはない訳でして、やっぱり、今、千葉県自体も全国同様、自給率っていうのはどんどん下がっていつている状況ですね。しかも、この農業従事者の数も激減している状況にありまして、例えば、これもネットで出ているデータですけども、平成2年に12万1千人居た農業人口が、令和2年には5万9千人ということになっています」

水島「ああ～半分以下になっている」

折本「そうです。30年の間に半分、半減してしまっているという状況ですね。それで、それにつれて耕作放棄地も物凄い勢いで増えていますし、ですので、こういった状況を何とか挽回して、自給率をどうやって上げようかということ考えた時に、やっぱり、生産サイドだけでなく消費サイドがしっかりと理解し、協力していかないと、農家さんも安心して穀物を作れないという状況だと思っんですけどね。

ですから私は浦安の選出の県議ですけども、生産者でなくて消費者のこういう現場から、こういう食育であるとか、要は食糧安保とか、食の安全だとかそういう視点で、やはり、こういう市民の意識を高めていつて生産を引っ張って行く、消費を引っ張って行くという、その為の橋渡し役にならなければいけないなど。その上で浦安だとか、千葉県の近隣にも物凄く農業が盛んな自治体はいっぱいありますから、そういう所と広域的に連携し

て、そういう仕組みをどうやって作ったらいいのかなあということを日々考えて活動しています。

県議会の中では、農林水産委員会に属しておりまして、やはり、そういうことをやりたいなあと思ひまして、例えば浦安で言うと、今、全国で広まっている有機学校給食とか、そういうものも是非、取り入れて広めていきたいなという風に思っています。お陰さまで、農林水産委員会に居ると色んな所を視察させて戴けるとか、物凄く沢山の情報を戴けますので、日々、本当に猛勉強させて戴いております。あとですね、ちょっと長くなって恐縮ですが…」

水島「いや、大丈夫ですよ、はい」

折本「はい。先日、このチャンネル桜の番組にも出演させて戴いた際に、アメリカのエマニュエル大使、けしからんという事で話をしまして、それで7月4日のアメリカの独立記念日に米国大使館に行って抗議活動をしてきたんですね。それもLGBT法案に対して、要はエマニュエル大使が内政干渉してきたことに対して、国民のそういう抗議の意志を、しっかり伝える必要があるということでやりました。

自分は県議の傍ら『維新と興亜』という雑誌の発行人を務めていまして、そこでも書きまして、今、室伏先生や鈴木先生、あと、鈴木宜弘先生にも、こちらにご寄稿戴いたこともありました。有難うございました。それで、やはり内政干渉に抗議したんですけども、ただ、やはりアメリカからの、或いはアメリカ大使からの内政干渉っていうのは、別に今に始まったことじゃないということで、戦後ずっと我が国は、アメリカから内政干渉を受け続けて来たということだと思ひます。

それは、ある意味で、日本が自主独立、要は独立国ではなかったと。アメリカの総指揮下に置かれていたという現実があるからだと思うんですけども、そういった状況が90年代以降、冷戦が終結して、やはりソ連という共通の敵が居なくなったあと、今度は日本が仮想敵になって、それこそ豚は太らせてから食えと言わんばかりに、これまでの金満大国にした日本を標的にして搾取し始めた」と

水島「うん」

折本「やはり、それが構造改革に繋がっていくと。90年代以降の年次改革要望書もそうですし、アメリカの内政干渉に拍車がかかったのは、そこからだと。今回、こういう食糧自給率だとか低下の一途を辿っているっていうのも、正に90年代以降の構造改革の一つの結果が、この日本の農業を壊滅という状況を引き起こしていると思うんですね」

水島「うん、うん」

折本「安倍さんも小泉・竹中路線からの脱却ということで、新自由主義から転換をするということで、第二次安倍内閣が始まりましたけども、結果的に種子法廃止したりとか農協を解体したりとか、そういうことをやっていたと。その結果、今日の農業の悲惨な現状だということを思ひますので、やはり単に農業だけの問題ではなくて、日本は、その根底にある安全保障であり、或いは、国柄ですね。

まず、農業っていうのは単なる産業ではなくて、我々の文化であり、伝統であり、国柄そのものなんだということだと思ひます。やはり国体の意識というものを、我々日本国民が

取り戻していかない限り、根本的な解決にはならないだろうと思います。すみませんが、最後に1点だけいいですか」

水島「ええ、いいですよ、どうぞ」

折本「はい、申し訳ありません。今、ウクライナ戦争でロシアとウクライナが死闘を繰り広げていますけれども、多くの国民が思っているのは、ロシアがあれだけの経済制裁を受けても予想外に持ち堪えているっていうのに、それこそ西側メディアの報道を受け売りにして、かなり、そういう風に意外に思っている国民が多いと思うんです。GDPで言うと、ロシアっていうのはアメリカの十分の一に満たないにも拘らず、欧米が束になってかかってロシアを倒すことが出来ないっていうのは一体、何故だろうかと。

やはりGDPだけでは、本当の国力っていうのは測れないんだなということを痛感しているんですね。その上で、やはり食糧自給体制という視点で見た時に、敢えて意図的に世界の核武装国の穀物自給率という数字ですが、農水省のホームページに出ている数字を抜き出して書いてきたんですけれども、残念ながら日本はカロリーベースで自給率38%しかないんです。米や麦、大豆といった穀物ですね。主要穀物の自給率っていうのは28%しかないという現状があります。

それに対して、じゃあ、例えば、今、戦争しているロシアの自給率は160%。それで、これと戦っているウクライナっていうのは、ここには書かなかったんですが何と404%もあるということで、まずは食糧自給体制っていうものが、完全に確立されているということだと思うんです」

水島「うん」

折本「敢えて、この核武装国と言うのを出してきたのは、国際政治の中で、やはり、それがいいかどうかは別として、核保有国というのが国際政治を規程しているという現実に立った時に、じゃあ、何故、軍事的に独立できるのかと言ったら、まずは先程、室伏先生もおっしゃいましたが、相手国から穀物の輸出を止められても経済制裁を受けても、自国民が少なくとも飢えて死ぬことはないという体制が出来て、初めて国際的に孤立してでも、我々は自主独立するんだという意志を貫けるということだと思うんですね」

水島「うん」

折本「ですから、この核武装している国は殆ど、まあ、イスラエルは6%で低いですがけれども、もう100%、みんな超えている現状に、ああ、イギリスは72%ですがけれども日本よりも遥かに高いと。日本は残念ながら北朝鮮よりも穀物自給率は低くて、最後に、この日本の現状は180か国の内129番目、OECD加盟国の中では38か国中、32番目ということで最底辺のクラスにあると。その最低辺のクラスの中に、韓国と日本という国が入ってしまっていると」

水島「うん」

折本「日本は28%ですけども、韓国に至っては更に低い26%ということですね。これは、やはり米韓FTAで韓国も農業が壊滅的な状態になってしまっていると。共通しているのは、日本も韓国も残念ながらアメリカの属国だということだと思うんですね。だから、はっきり言って韓国を馬鹿にしている場合じゃないと」

水島「うん」

折本「結局、お互いがアメリカの属国で、要は国の独立の基盤をアメリカに売ってしまっている。或いはグローバル資本に売ってしまっているという現状があると思いますので、いかに、この状況から脱却するのかということを考えなければいけない。じゃあ、その為に何をしたらいいのかっていうことを、今日は議論させて戴ければと思います。長くなりまして、すみませんでした」

山田（正）「あのう、一つだけ」

水島「はい」

山田（正）「先程、自給率を言いましたよね。今、日本は一人当たり980キロカロリーぐらいだと。かつて与党の時に、僕は、当時の自衛隊の上の方の幹部と日本の国防について話し合ったことがあるんです。あの時に、いざ戦争になる時、食糧が止まる時に自衛隊は一人当たり最低1200キロカロリーないと戦えないんだと。ところが、日本の国民が980キロカロリーしかないっていう時、ただ自衛隊、軍隊にだけっていうか、自衛隊員にだけ、その食糧をよこせていうことは出来ないだろうと」

水島「そうですね」

山田（正）「ということは戦いが出来ないっていうことです」

水島「特に時間は長くなるね」

山田（正）「そうそう」

水島「だって、今、山田（正）さんがおっしゃっていたのは、1200っていうのはね、大体、普通の成人女性ぐらいの基礎代謝率ですから、基礎代謝率っていうのは、つまり、心臓を動かしたり内臓を動かしたりね、何もしないで、ただ寝転んでいても1200キロカロリーぐらいは使う訳だからね」

山田（正）「大体、使う訳です」

水島「今、自衛隊は、彼女が知っているか分からないけども確か3千何百キロカロリーぐらいだと思いますよ。防衛活動をやっている自衛隊は。だから、とんでもないですよ、だからねえ」

山田（正）「とんでもない話です」

水島「はい」

葛城「それと、今日、佐藤正久議員が確かツイッターで中国が日本の食糧を輸入しないって言ったじゃないですか、それを自衛官が食べるようにしたらどうかっていうことを呟いておられました（笑）」

水島「だから有難うと言ってね、もう、よく言ってくれた中国って言ってやればいいですよ。国内に回せばいいのでねえ。と思いますけど、鈴木（宣）さんのお話も聞いてみたいと思います」

山田（正）「そうですね。鈴木（宣）先生のお話を」

水島「お待たせしました、鈴木（宣）さん、お願いします」

鈴木（宣）「あ、どうも、皆さんのおっしゃる通りですね。今、もう既に食糧はお金を出せば、いつでも安く輸入できるという前提が崩れてしまったということ、我々は、まず、念頭に置かないといけないということですが、実際には、それと逆の方向に、国の方向が進んでいるという実態を危惧しております。

私がクワトロ・ショックと呼んできたように、コロナ・ショックでも、まず物流が止まりそうになって、そして、今度は中国の爆買いですね。今、日本が買い付けに行っても、あらゆる物が残っていない。中国の方が高い価格で大量に買い付けてしまって、日本の商社の主導権がもう奪われてしまっていると。この間、丸紅の方が説明してくれましたが、今、中国は有事に備えて、とにかく備蓄を増やすということですね」

水島「はい」

鈴木（宣）「4億人の中国の人口が1年半、食べられるだけの備蓄をする為に世界中の穀物を買占めていると。価格はそう簡単には下がらない」

水島「うん」

鈴木（宣）「片や、日本の備蓄能力というのは1.5から2か月分だということですね」

水島「ねえ、はい」

鈴木（宣）「まあ、この差を見ても、大変、日本の準備がどれだけ遅れているかということになる訳ですけども、そして、今年顕著になって来ているように、この異常気象が通常化して、大干ばつと大洪水が世界や日本で起きて、供給がどんどん不安定になっている。

もう世界の需給は逼迫基調を強めている事は間違いないし、これからもそうなる。そういう時に、紛争が起こったら大変なことになる。すでに、このウクライナ紛争が起こって、しかも長引いて、ロシアやベラルーシにとって日本は敵であるから売らんということになったし、ウクライナは勿論、出さずに出せない。そこを、またロシアが更にオデッサの港を攻撃、再開してしまったと」

水島「はい」

鈴木（宣）「全く見通しが立たない。一番深刻なのは、先程も話がありました通り、こういう状況を見て、その輸出規制の広がりなんですよ。今、特にインドは米も麦も世界有数の1位2位を争う生産輸出国ですが、まずインドは大分前に小麦を止めましたよね」

水島「うん。そうですね」

鈴木（宣）「ちょっと前に米を止めちゃったんですね。だからインドは米の輸出の40%を占めているんですね。それが米の禁輸をしたってことで大騒ぎになりました。今や、こうやって、まず自国民を守る為に輸出はしないという国が30か国になってきました」

水島「うん」

鈴木（宣）「これが広がれば、もう本当に物が出て来ないという状況です」

水島「うん」

鈴木（宣）「そういう世界情勢の悪化の中で日本の農業はどうなっているかと、そういう結果、穀物も入って来ないから餌が2倍に上がる。それから化学肥料の原料も買えなくなってきたら化学肥料も2倍に上がる。燃料も5割高で生産コストがどんどん上がって、しかし、中々農家の農産物の販売価格は買い叩かれて上がらないから、どんどん赤字で日本の農家が潰れてきている訳ですよ」

水島「そうですね」

鈴木（宣）「世界から物が中々入って来ないことも分かってきたのに、じゃあ、日本の農家さんに頑張って貰って命を守れる体制をつくらないといかんとやっている基盤が、日本の農家がどんどん潰れて、更に生産が減っているというね、この状況を見たら、今、我々がやらなきゃいけないことは、今、食糧農業農村基本法の改定も20年ぶりに行っていますけども、それをやるっていうことは、この世界情勢の悪化、日本農業の危機を踏まえたから、私達は、ここで市場原理主義の欠陥が明らかになった訳だから、普段、市場原理主義はいいように見えても、貿易が止まったら、おしまいじゃないかと。貿易、止まった時に命を守る安全保障のコストが入ってないという理論は使い物にならないと。

だから、それを反省して、私達は徹底的に食糧自給率を多く出来るように国内生産を振興して、危機に備えるという決意を表明するのが、今の農業の憲法の改定のね、筋、だからやるんだという風に思っていた訳ですよ。今、出てきている案を見てみると、何と残念ながら食糧自給率という言葉が入っていないです。食糧自給率向上という言葉もありません。そして食糧自給率については5年毎に決める。

今迄は重要な一番の指標になっていたのを、それを数ある指標のひとつという形で格下げしまして、議論の中では、食糧自給率を目標にすると、国益を見誤るみたいな議論が行われているっていう、この今の世界情勢、国内情勢を見て、我々がやらなきゃいかんと普通に考えることと全く逆のことが今、態々行われて、しかも有事と平時の自給率を分けるという議論が非常に盛んに行われていますが、結局それは、とどのつまりが、とにかく平時に農業は別に要らないんだと。平時は輸入しておけばいい。そして有事については、有事立法だけは作ると。普段の農業を振興する政策は具体的には無いんです。

有事になったら、花を作っている農家さんを命令に従ってサツマイモを植えなさいと。その命令だけは従って、みんな、増産するんだぞと。そこだけ強化するって、誰も出来ません。まず普段を支えなければ出来ない。でも、そんな議論をしているんですよ。

それと、もう一つ驚くべきは、皆さんからも水田の重要性っていうのがありましたけれども、今、短絡的に米が余っているんだから、水田を潰せっていう政策も重視すると言っている。田んぼを潰して畑にすれば一時金を渡すから、どんどん、そうすればいいじゃないかと。

皆さんが言われたように、田んぼがあって、そして、いざという時には安全保障があり、伝統文化、治水、そして洪水も止められる田んぼの重要性をね、ただ米が余っているから潰して畑にすればいいじゃないかっていう議論も今、基本法の中でも行われていると。

しかも多様な農業経済が地域の共同体の中で、みんなが支えあっていくのが大事だということを、コロナ・ショックでもみんなが判った。一極集中をすると、そういうことは駄目なのだ。反省したかに見えたのに、また、農村には何処かの企業が来て、巨大な経営がね、目先の効率的なところがやればいいみたいな議論になってしまっているんですよ。

もう非効率というか中小、色んな半エックス（X）とか含めて色々頑張っている方、そういう方々は、もう別にどうでもいいんです、みたいな議論に、またなっているんですよ。だから、こんなことをやっていたら、本当に、我々は、竹中平蔵先生もよく言っておられたけど、無理に農村の地域に人が住む必要は無いでしょと。ね。そこで無駄なお金を使って行政やったりしなきゃいけないんだから、そういうことをやめて、原野に戻せばいいんだというね。

そういう議論に近づいて、むしろ、逆に近づいている。これをやれば、本当に、これから日本の農業農村は加速度的に苦しくなっていくしますので、どんどんみんな住めない所になりますよ。そして、東京に一極集中して人が住んで自給率も下がって、いざという時に物を止められたら、本当に、まずコロナみたいなのが蔓延して、そして餓死して、みんな、おしまいですかというような歪な日本を望むんですかと、そういう当たり前のことが、今、問われなきゃいけないと。

さっきから話があるように、食糧自給率なんてゼロでいいんだみたいな議論ですよ。いざという時の持久力があればいいんだと。持久力って何かと言えば、さっきのサツマイモですよ。とにかく、みんな、その時だけ校庭やゴルフ場や道路に盛り土して芋を植えて、とりあえず芋で凌げば何とかなるっていうことを、真面に議論しているということの情けなさを、本当に痛感しているというのが今の現状でございます。はい」

水島「そうですねえ。はい。私も前の討論の時に言ったんですけど、つまり、田んぼとかいうもの自体を単なる食いの生産工場みたいなね、だから効率だ何だとかいうことを言っているんで、本当は、実は、日本の国柄を作っている。心も創っているってね。そういう農業の場所っていうのは、田んぼとかいうのは、そういうものがあるんだっていうことを、まず、まあ、司会ですけど言わせて貰うと、他の番組枠でも言っていることですけど、いつも、こう言うと、みんな、解って戴けるんですよ。

何故、『いただきます』『ごちそうさま』って言うかっていうと、食べ物、塩と水以外は殆ど生物、生き物の命です。それによって我々は、自分の命を永らえさせたり成長させたりしている。つまり植物でも魚でも肉でも何でも、みんな、命を戴いて自分の命を永らえている。だから世界全体というか自然、或いは日本の国全体に、とにかく有難うという気持ちを持って『いただきます』と言うようなことの、元々ある大きな共同体の中の島国であるけれども、そこから命を戴いているっていうね。本当は、これが食育なんですよ。

まず、子供に教えなきゃいけないことです。それから、お父さん、お母さんが働いて食べ物を子供達に与えている。お父さんは大変なんだよ。お母さんも頑張っているんだよ。だから、今、食べ物が食卓にあるということ。まあ、パンでも米でも何でもいいですけども、そういうことが教えられていない。だから親は食わせるのは当たり前みたいな状態になっている。

それから、もう一つ、お百姓さんや漁師さんや色んな人達が一生懸命、獲ったり加工したりして、こういう食べ物を届けてくれている。これに対する社会とか世界全体、国の共同体全体に対する感謝の念というのを、まず食べ物の命っていうのはそうになっているんだというね。

我々の国は、神様、今日の糧を戴いて有難うというキリスト教系の国とはまた違う、今、生きている、この全ての川や水や雲や海や全部を戴いて有難うございますということから

『戴きます』という、そういう形の国だと。こんな凄い国だよと。だから、お父さんにも有難うって言わなきゃ、お母さんにも有難うって言わなきゃいけない。というようなことが古い話ですけど、私の幼稚園の頃は『お父さん、お母さん、有難う。お百姓さん、有難う、いただきます』って、幼稚園の頃は、まず、それを言ってから食べていたんですね。

そんなことは今、言ったようなことは教えてくれないけども、とにかく子供は周りの人達の色々な思いや努力によって食糧を戴いている。だから一粒も残しちゃいけないよっていうのが、まあ、リアリティで子供は感じていたんです。お弁当でもね。こういうような当たり前の日本人にとっての食べ物、特に米ですけど、これは連作が出来るっていうね。どんなことやっても米は連作が出来るって。だから『瑞穂の国』なんだっていうね、恵まれた温暖な水と太陽とね、こういうところがあるということをお子に教えてやったら、っていうことが全く教育で教わっていないですよ。

この間、ちょっと調べたら食べ物の中で20ぐらい好きなものをあげたら、和食が殆ど無いんですよ」

葛城「え～」

水島「カレーが好きだっていうのがあるね（笑）それから回転寿司って書いてある。子供の好きな食べ物は、みんな、ハンバーグとか何だとかね、こういう、だから子供に、そういう食べ物を与えているのと、今、言ったように食べ物っていうものは何だと。命だと。みんな、植物や動物の命を戴いて、さっきの鯨もね、残酷だ何だって言う馬鹿が居るけどね、とんでもない話でね、これも戴いているんですよ」

葛城「日本人は、ちゃんと鯨のお墓とか塚までつくって、鯨さん、有難うございましたって感謝して戴いていたんですよ」

水島「そうですよ。隅から隅までね」

葛城「はい」

水島「もう全部、利用している。アメリカみたいに油だけ使って、あとは全部、捨てちゃうようなところと違うんだというね。今、アイヌの話で話題になっていますけど、熊祭りだって、神様から自然から熊をプレゼントとして送って貰って肉を戴いて、それで魂だけ天の神様に返すというような感じのことを考えると、それは全部、日本人はみんなそうですよ。別にアイヌの人がそう言っているだけじゃなくてね。

こういうようなことのそういう思いという、これは別に右も左も無い話でね。こういうことを、ちゃんと教えてやれば、本当に食べるものっていうものは有難いと思ってくれるんじゃないかと。それを子供に教えなきゃいけない。だって店での食べ残しで捨てるものが4割近くあったでしょ。38%かな。こういうことまでやっている。さっき言った食糧自給率の話とかね、買えばいいっていうけれど食べ物自体、普通の物と違うんだと。石鹸を買うとか、鉛筆を買うのと違うんだというね、だから、こういうようなことが命というものに対する敬意が全く無い状態だということ、根本的に変えていかなきゃいけないと、私は思っていますね。

だから、さっき折本さんが核武装した国と食糧自給率、一種の相関関係がある。これも、もう一回、何度も言っているので聞いた人も居ると思いますが、このウクライナ戦争で、国際的な石油エネルギーメジャーは40兆円ぐらい儲かっています。僅か1～2年で40

兆円も儲かった。これを報じたのは読売新聞だったかな。それから勿論、モンサントとかドイツのバイエルなんかは食糧メジャー、だから戦争をやってくれたら小麦が出ないから、どんどん値上がりするし、中国なんか今、1億トン以上も小麦を備蓄している。

こういうようなことを考えると、戦争をやって儲けている奴がゴロゴロ居る。勿論、武器商人も大量に売って、だから、さっき折本さんが言ったロシアはエネルギーを持っているし、それから食糧も持っているから潰れないんですよ。逆に、石油の価格が今、どんどん上がっている。我々の国みたいなものを買えばいいんだなんて言っているのは一番、困っている。

もう一つ言うと、為替の問題で言うと、皆さん覚えていると思うけど、10年、15年前ですかね、ちょっと正確には言えないけど、円は100円ぐらいだったじゃないですか。今は149円とか148円とか147円とかね、1.5倍ぐらい円安になっている訳ですよ。だから買うと言ったら1.5倍ぐらいの値段で物を買わなきゃいけない。

国際金融資本は、いくらでも為替操作が出来るから、こういう状態を考えたら、まず自立を、ちゃんと農業と食べる物と軍事も含めてね、安全保障っていうのを本当にやらなきゃいけない。現職の国会議員のね（失笑）山田（俊）さん、こういう本当に日本人の命とか子供の未来を危うくしているっていうのが、今の農業の状態という感じがあるので、今日、皆さんから色々伺ってこうと思うんですけど、スカイプの鈴木（宣）さんがおっしゃったようにやらなきゃいけないことはいくらでもあるし、やっぱり小泉時代の構造改革から、その前のGHQからって言えば、そのままなんだけど、そういうのは徹底的に日本の農業を潰していく。

やはり日本の国柄というのをね、そこのところを潰しているというのも一番、大事じゃないかなあと。まあ、この企画をした人間として、そういう話も考えているっていうことですよけど、じゃあ、個別に話していきたいと思うんですけど、食糧自給率に示される日本の農業、これは野党の側から、ずっと色々な農業問題、或いは民主党政権の時の大臣としても…」

山田（正）「はい」

水島「今の日本の農業政策、まあ、色々出ましたけど、山田（正）さんから今、ご覧になって、どうですか」

山田（正）「そうですね。山田（俊）先生はよく解っていると思うけども、今回、食糧自給率、食の安全の為に何とかして食糧農業基本法を変えようっていうことでスタートしたと思ったら、全く食糧自給率の話が出て来ない、種の話も出て来ない」

水島「そうですね」

山田（正）「だから、私共は、やっぱり食糧、例えば、私共は『農業』というでしょ。で、農業と商業とか工業と同列で考えているけど、EUとかアメリカに行ってもよく話をすると『農業』とは言わないんですよ。『食糧』なんです」

水島「うん」

山田（正）「命を繋ぐ食糧だから、食糧に対して国は税金を払う」

水島「うんうん」

山田（正）「例えばEUで、あんな所でも自給率が、例えば確かにイギリスは、かつて私が牧場をやる時は37%しかなかったのが、今77%ぐらいまでになった。これもね、言ってみれば、その食糧だから、国民の命を繋ぐものだから、所謂、商業や工業と違って自由市場競争に任せちゃいけないと。農家の所得ですが、EUでは8割が戸別所得補償ですよ」

水島「そうですね」

山田（正）「アメリカでも4割が戸別所得補償です」

水島「うん、アメリカも凄いですよね」

山田（正）「そうしないと、実際に農業はやっていけないんですよ。私も農業をして、色々牛を飼ったり、豚を飼ったりして大変な目に遭った経験をしましたからね、だから、是非、今回、本気で日本の食糧自給率、農業を再生するにはどうしたらいいかっていうことですが、自民党の先生方も与党の先生方も今の状況では政府に任せていたら、益々酷い結果になりますよ」

水島「う～ん…」

山田（正）「だから、その為にまずどうするかということは、例えば、今、年寄りで、70代とか80代が農家を支えているって言うでしょ。だから、いずれ居なくなるから、食糧を輸入するべきだっていう言い方するけど、そうじゃないんですよ。今の若い人は、農業をやりたいんです」

水島「やりたい人、多いですよ」

山田（正）「やりたい人ばかりですよ。特に今は自然農業が若い人に人気で、農薬も化学肥料も要らないっていう農業を本当に指向して、例えば私の五島列島でも、年間400人ぐらい入って来るんです。ところがね、また直ぐ出ていくんです。何故かって言ったら食べていけないから…」

水島「そうですね」

山田（正）「ね」

水島「はい」

山田（正）「何故、食べていけないかというと、私が大臣の時に戸別所得補償をやったんです。農家に対して米、麦、大豆、主食について、次の年に農家所得、右肩下がりだったのが何と1年間で17%上がったんです」

水島「ああ…」

山田（正）「農家の所得がね。そして、その時に僕は所得補償、戸別所得補償、農家に直接支払いでやったんです。その時、僕は認定農業者制度というのを全部、やめさせました」

水島「うんうん」

山田（正）「認定農業者制度で、年間、これだけの所得のある農家で、実際、農業をやっている人じゃないと認定農業者として認めないと、それには国の税金の補助金を出せないと、そんな馬鹿なことは無いと。農業をやろうという人なら、みんな、農業者だと。認定農業者制度を廃止して、そして戸別所得補償を」

水島「うん」

山田（正）「これまで農協さんを通じて全中さん通じて段階的に国の補助金が農家に落ちたけど、それをやめて直接支払いでやったんです」

水島「うん」

山田（正）「農家に。例えば、あの時、全中さんと随分、喧嘩したんだけど、銀行預金でも郵便局の預金でもいいと。農協の預金じゃなくていいと。こうして農業をやっていると、農業をやったということであれば、所得補償を払うんだと。実はあの時、財務省と大喧嘩したんです」

水島「うん。そうでしたね」

山田（正）「これまで補助金って貰うには手続きが大変な訳です。物凄い書類を何冊も、自分でやったことがあるけど大変なんです、戸別所得補償をやる時に、僕は大臣として、こう言ったんです。1枚のペーパーにしてくれと。それで農家は字を書いたり書類を書いたりすることは出来ないから、全て、こちらで用意して、農家には署名だけでいいと。何を作るかっていうのは米、麦、大豆で、それで補助金をやると言ったら、財務省が駄目だと言う訳ですよ」

水島「まあ、そうですね、財務省はねえ」

山田（正）「ね。しかし、それをやってのけたんです」

水島「うん」

山田（正）「実際に…」

水島「やれば出来るとね」

山田（正）「やれば出来るんですよ。ね、最後は財務省も納得しましたよ。だから実際に、まず、若い人達の認定農業者制度を無くして、農業者はみんな同じだと」

水島「うん」

山田（正）「やりたい人ならば」

水島「うん」

山田（正）「そこに、もう一回、直接支払いの戸別所得補償をやる。まあE Uみたいに8割とか云々じゃなくてもいいけど、少なくとも、私がやった時程度のものはやれば、最低でも貯めていけるんです」

水島「うん。そこなんですよ」

山田（正）「ね。僕はね、一番、これをね、本当は今度の食糧農業基本法の一つの骨格にして欲しいんです」

水島「うん」

山田（正）「これ、僕はね。もう一つは種です。さっき、鈴木先生が言いましたけど、その食糧自給率の話も、今度の驚くべきことに食糧農業基本法の改正に出て来ない」

水島「うん」

山田（正）「種が大事だということですよ。例えば今回のコロナの時に、輸送が一時止まったら、種が止まるんです。ところが8割、野菜の種は輸入の種です。そうなると、播種期に遅れて困った農家がいくらでもありましたよ。だから、自分の所で、もう一回、種採り」

水島「うん」

山田（正）「自家採取をして、米、麦、大豆、大事なものはね。ところが種子法廃止の時に政府はこう言ったんです。民間の活力に頼るんだと。当時の安倍さんだ。言わば、三井化学の『みつひかり』というF1の米の品種がある」

水島「うん、うんうん」

山田（正）「これはね、こういうペーパーを作って、それを宣伝して回ったんです、政府は。その時のペーパーを、私は裁判にも出したんです。種子法廃止違憲確認等訴訟で。何と、そこに『超多収』と書いてあるんです。超多収、みつひかりは1代限りです」

葛城「沢山、採れるってということですか」

山田（正）「ん？」

葛城「沢山、採れるってということですね」

山田（正）「採れる」

葛城「はい」

山田（正）「全然、採れないんですよ、植えたら。まさに優良誤認の表示を、本当に、それを政府がやっているんですから」

水島「ねえ」

山田（正）「そしてね、当時、4千ヘクタールぐらい迄、みつひかりが伸びたんです。F1の品種のやつが。ところが今年の2月、大変なことになったんです。何故かって言うと三井化学がやったんですが、今、三井化学アグロソリューション（現三井化学クロップ&ライフソリューション）というのかな、そこが今年の2月になって、突然、これまで毎年やって、みんな契約しているっていうか、種苗会社に渡してきた種が、今年は供給できませんと」

水島「えっ」

山田（正）「突然、供給できませんと。それがね、全く報道されないんです」

水島「そうですね。私も今、初めて聞きました」

山田（正）「ね。それで本当に農家は困ったんですよ」

水島「うん」

山田（正）「そうしたら今迄の公共の種子、所謂、各都道府県に法律上、義務付けして種子法で、安く、例えば、みつひかりという品種は、これまでの公共の種子の、こしひかりの価格の10倍するんです」

水島「うん」

山田（正）「それを政府は進めて回ったんだけど、それが突然、農家に入らなくなったんです。今迄は公共の種子だったら、種子法に基づくものであったら、県とか農協が保証したんです」

水島「うん」

山田（正）「例えば発芽率が90%にしたら」

水島「うん」

山田（正）「ところがね、それが止まって、どういう状況であったかと言うと、発芽率90%と言っているんです。それは実際にはとんでもなかったんです」

水島「うん」

山田（正）「不良品で」

水島「なるほど」

山田（正）「しかも大変なことに、混ぜ物をしておったんです。他の品種を入れておったんです」

水島「ああ〜」

山田（正）「農水省も、さすがに穀物検査室が10ぐらいの前の種苗法に従って、これは種子としての確じゃないと、不良品だと決定したんです」

水島「うん」

山田（正）「農水省は、それを明らかにしなかったけど。それを受けて、やはり一応、自粛という形で、三井化学は今年、販売をやめますと言ったんですが、それは一片の通知なんです。種苗会社に通知されたのを見ましたけどね。そして、そのあと直ぐ消費者庁が、種子法は生きている物だからPL法、製造物責任の適用が無いと言うんです。私は岐阜の米農家の田中さんという人の所へ行ったんです。100ヘクタール作っていたんでね。それが入らないから、まず農協に、その為の指定した農薬とか指定された化学肥料を用意するんです。アグロ企業って言うか、三井化学もそうだし、住友化学もそうだし、日本モンサントもそうだし豊田通商もそうですがね、だから、その肥料を注文しておったのを解約しようと。だけど農協が応じない訳です」

水島「ああ…」

山田（正）「と言うのは、もう農協も手当てしているから」

水島「そりゃそうだよね、持っているから」

山田（正）「それで、どうしようかと。今、約1400ヘクタールの農家の人が頭を抱えた訳ですよ」

水島「なるほどねえ」

山田（正）「これはね。そういうことを、この種苗会社は、販売している小さな種苗会社の若い社長さんも、いや、一片の通知が来ただけで、とんでもないと」

水島「うん」

山田（正）「文句を言ったら、君らが全部、説明して回れと。来年は出すからと。そう言われて、田中さんという人がそういう人達と会って、そして中日新聞の地方版がそれを書いてくれた。それを見て、僕は調べて、その農家に辿り着いたんです。そして、それを、僕はネットでフェイスブックで書いたんです」

水島「うん」

山田（正）「そうしたら77万人にアクセスされましたよ」

水島「ああ…」

山田（正）「そうしたらね、さすがに三井化学アグロの方も農水省で記者会見するんです。確か2016年かな、種子法廃止前から他の品種を混ぜて、『みつひかり2003』を売っていましたと。これは明らかに種苗法違反です」

水島「それは本当に大変なねえ…」

山田（正）「うん」

水島「はっきり言って、これは犯罪ですよ」

山田（正）「うん、犯罪です」

水島「うん」

山田（正）「明らかに…ん？」

水島「これは実際、詐欺ですもんね」

山田（正）「これね、言ってみれば詐欺ですよ」

水島「みつひかりだって言って、インチキな違うものを…」

山田（正）「違うものを売っていたんだから」

水島「うん」

山田（正）「これは正に種苗法に基づく表示義務違反でもあるんです」

水島「うん」

山田（正）「それで、私もこれこそ種苗法違反だと書いたんですが、さすがにね、三井化学アグロソリューションも種苗法違反でしたと認めたんです」

水島「ああ〜」

山田（正）「これはね」

水島「うん」

山田（正）「それで、ただそれだけで、賠償はどうするんだと言っても、賠償については、個々に対応する予定ですよとっていて…」

水島「そういうふうにするのか〜」

山田（正）「けしからんのは三井化学アグロソリューション、大企業ですよ」

水島「うん」

山田（正）「そこが記者会見して、しかも、そのホームページで種苗法違反を犯してきましたと認めているのに、大新聞、テレビ、何処もそれを取り上げないということです」

水島「なるほどねえ」

山田（正）「ね」

水島「う〜ん」

山田（正）「だから種子法を廃止して、今、言ったように三井化学とか住友化学とか、そういうところに任せたら、実際に日本の食糧は益々大変なことになるですよ」

水島「そうですねえ」

山田（正）「こういう種が駄目だったから、それで、いっぺんに済まされる話じゃないの」

水島「だから、そうするとね、今、大変、びっくりする話だったけれども、つまり、いつでも意識的にもやれるってということですね」

山田（正）「そう」

水島「何かあったら種を混入するとかね、混ぜ物を入れて作り難くしちゃうとか、色んなことが出来ちゃうってことでね、それで謝って済む問題じゃないですよんね」

山田（正）「済まないです」

水島「なるほどねえ。鈴木（宣）さん」

鈴木（宣）「はい」

水島「今、ちょっとお話を聞かれたと思いますけども、こういうことというのはずっと日本の農業の中で、この今の種子法、種苗法っていうね、こういう法律がどんどん変えられてきたんだけど、こういうことって、これからは起きるし、これまでもあったんですかねえ」

鈴木（宣）「そうですね」

水島「うん」

鈴木（宣）「はい。今、明らかになったことも大変な問題ですけども、同じようなことが色々行われていて、例えば、この一番、最新の問題では、表示を意図的にしないことによって、いっぺんに色んな物を食べさせてしまおうっていう、この流れも関連で、非常に大きな問題だと思います。一つは、遺伝子組み換えでない大豆で作った豆腐ですよという表示が、この4月から実質、出来なくなったじゃないですか」

水島「はあ～、そういう…」

鈴木（宣）「もうアメリカからの要求で、こういう表示をすると日本の消費者が遺伝子組み換えに不安になるから誤認表示であると。アメリカが安全だと認めている物に、そういう風な表示をしちゃ駄目だということ…」

水島「そうですねえ」

鈴木（宣）「もうTPP交渉の頃から要求で言われていたことも知っていますけども、それが、ついに実現しましたよね」

水島「うん」

鈴木（宣）「そして日本人は遺伝子組み換えでないかどうか判らずに、もう遺伝子組み換えを、どんどん食べるしかないという風な表示になった。そして、もう一つはゲノム編集の表示が最初からないですよ」

水島「そうですね」

鈴木（宣）「それがもう、動物にもゲノム編集を認めたのが日本が最初で、既にお寿司屋さんで、ゲノムのムキムキ真鯛とかトラフグが出ているが、報道もされませんので、結局、日本の方はあまり知らないが、世界では有名な話で、アメリカの団体なんかポスターまで作って、日本、えらいことやっとなぞと」

水島「うん」

鈴木（宣）「日本の世界で最初のゲノム寿司、こんな物、食べられるかという風な動きがあると。それから、もう一つは表示の問題で言うと、もう一つ無添加の表示ですね。無添加の表示も厳密でないから、これをしてはいけないという形になって来て、添加物がいくら入っていても食べさせてしまえという話ですよ」

それと、もう一つ、一番最新のものは、コオロギですよ。コオロギについて、先程も話があったように、今迄の農業畜産というのは温室効果ガスを排出していた、実は一番の主犯だったという議論を盛り上げて、だから、これからは代替農業が必要なんだと。代替農業とは何かと言うと、コオロギと培養肉と人工肉。それから無人農業みたいなことですね」

水島「そうですねえ」

鈴木（宣）「それでコオロギについても、今、日本で何が起きているかと言うと、中国でも食べないし、避妊薬になっているようなものを、福島県の小学校で、もう出してしまうたりとか…」

水島「ああ、もう、出したんですか、うーん」

鈴木（宣）「更に問題なのは、コオロギ・パウダーと書かなくて、名前の判らないパックに入れて、日本人の食べる物に、どんどん混ぜて売って来ている訳ですよ」

水島「う〜ん、そうですねえ」

鈴木（宣）「コオロギのパウダーを使う場合には、コオロギであることを、きちんと表示しなきゃいけないはずですよ。それもなしに、それも避妊薬にあるようなものを、食品にどんどん混ぜてでも売ってしまって判らないようにして、そして、ただ、一部の企業が儲ければいいという、日本人の健康を蝕んででも、そういうことを次々とやっていくっていう流れが今起きていて、報道がされないから、それも判らないまま、結局、我々は、それにおいてもね、流れの中に置かれてしまうということが色々起きている事で、非常に深刻な事態だなと思います」

水島「そうですねえ。いや、まあ、こう…」

山田（正）「さっき言った…」

水島「あっ、ああ、はい」

山田（正）「最初からゲノム編集、表示も出来なくなりましたよね」

水島「うん。そうですね」

山田（正）「遺伝子組み換えもそうだったんですが、実際に米でもシンク能改変イネっていうゲノム編集の米を政府は用意しているんです」

水島「うん」

山田（正）「ワーキー45という遺伝子組み換えの米の種子を用意しているんです。私に、持ってきましたよ」

水島「ああ」

山田（正）「これがF1の種子で、まず1代限り。そのあとゲノム編集、遺伝子組み換えの種子の米麦、そういったもので、日本人はこれから作りなさい、食べなさいということが進んでいるんですよ。鈴木（宣）先生が言った中でね、もう一つ、山田（俊）さん、全中が中心になって運動したんだけど、原料原産地の表示」

山田（俊）「うん、うん」

山田（正）「全ての食品に原料原産地を表示すると」

一同「うん」

山田（正）「これには業界から凄い抵抗があったんです。それでも、あの時、全中は頑張ったんです」

山田（俊）「そうなんですよね」

山田（正）「農協団体」

山田（俊）「うん」

山田（正）「それをやったのに、いつの間にか法律でやったのに政令で国内製造を認めたん  
です」

山田（俊）「あー、そうそう、そう」

山田（正）「だから小麦粉に国内製造って書くと国産か外国産か判らないじゃないですか」

葛城「ああ、そうですね」

水島「ああ、そうだよねえ」

山田（正）「ね。いや、パンとか大麦も全部、国内製造になってしまう」

葛城「そうかあ…」

山田（正）「え？」

室伏「書いてありますね、国内製造ってありますね、はい」

山田（正）「うん。だから、先程、鈴木（宣）さんが話しましたが、これから食品表示の  
問題っていうのは、本当に大変、大事な話なんですよ」

水島「いや、そうなんですよ」

山田（正）「例えば、鈴木（宣）さんが話したことに捕捉すると、食品添加物っていうか、  
食品添加物の化学調味料ってあるじゃないですか」

水島「うんうん」

山田（正）「化学調味料」

水島「グルタミン酸みたいな、あれですね、はい」

山田（正）「化学調味料不使用とか、食品添加物無添加っていうのは、農水省と政府が進め  
てきた表示なんです」

水島「うん」

山田（正）「それを、突然、やったら刑罰に処すということになったんです」

葛城「ええ〜…」

山田（正）「それもガイドラインの変更だけ」

水島「う〜ん」

山田（正）「とんでもないと。それで、何故、これをやったかと言うと、例えば、味の素の  
化学調味料とか、そういう会社の調味料があるじゃないですか」

水島「うん」

山田（正）「その化学調味料も、鰹節を煮出して出した旨味成分も同じアミノ酸なんです」

水島「うん」

山田（正）「違いは無いと。ところが、その化学調味料を無添加という表示があると、いかにも化学調味料が悪いものだと、国民に誤解され兼ねない」

水島「うん」

山田（正）「それで、あの無添加の表示をやめさせる。そして食品添加物、化学調味料不使用という表示をやめさせる。もし、そういう表示をしたら、これまでは政府が進めて来たけど罰金。ということ平気で出されるんですよ」

水島「そうですねえ。全く国民の側に立っていないですよ、う～ん」

山田（正）「はい。その時にね、鈴木先生もそうですが、みんなで頑張ったんです」

葛城「うん」

山田（正）「どうして頑張ったかと言ったら、食の安全議連っていうのが国会の中にあっただので、そこに我々の意見と消費者庁、呼んで貰って、両方、聞いてくれと」

水島「うん」

山田（正）「だから、みんなが怒り出しましてね」

水島「うん。そりゃそうでしょう」

山田（正）「ね。そこで国会で、例えば、グリーン・コープさんの生協のお得意さんで海千さんという小さな福岡の辛子明太子を作っている業者が居た訳です。辛子明太子は、普通、食品添加物、保存料だけで9種類ぐらい使うんです。そこは本当に無添加で明太子を作っている、辛子明太子。その人も国会に来て貰った」

水島「うん」

山田（正）「そして大臣に、本当に、こうして無添加でやっている人が居るんだと」

水島「うん」

山田（正）「貴方がたは単なる消費者庁のガイドラインの変更だけで、この人を処罰できるのかと」

水島「うん」

山田（正）「返事をしろと言ったら、さすがに大臣、処罰できませんと言いましたよ」

水島「うんうん、うん」

山田（正）「だから、我々みんな生協さんとか、みんなで食品添加物の表示が本当に無添加だったら堂々とやろうじゃないかと」

水島「うん」

山田（正）「我々、弁護士も居るし」

水島「うん」

山田（正）「こうして添加物不使用表示、化学調味料不使用という表示を、これから堂々と続けようじゃないかと」

水島「まあ、そうですね」

山田（正）「ね。まあ、そういう戦いをしているところです」

水島「なるほどね。山田（俊）さん、これは返って改悪になっていくじゃないですか」

山田（俊）「いや、おっしゃる通りですね（苦笑）」

水島「与党の側だから一応、聞くけど、いや、別に山田（俊）さんの責任じゃないけども、どんどん悪くなっているじゃないですか」

山田（俊）「あれは、やっぱり政府の責任ですね」

水島「政府の責任ですよ」

山田（俊）「例えば、私なんか議員の活動、長い訳ですから、それらの手当て、どう考えるかみたいなことに、お役人と政府の関係者はね、簡単に整理してしまうっていうか理屈をつけてしまうと」

水島「うん」

山田（俊）「みたいなことがあって、ですねえ、本当の意味での、その問題追及をやらせてくれないって言うか、今、やらせないようにしていますよね」

水島「なるほどね」

山田（正）「なるほどね」

山田（俊）「はい。だから、その分だけ党もだらしがないですね。議員もだらしがないですね」

水島「うん」

山田（俊）「やっぱり、ちゃんと言わなきゃ」

山田（正）「先生に、ちょっと農水省の中を調べて欲しいんですがね。というのは農水省に色んな企業から回転ドアで…」

山田（俊）「ああ～」

山田（正）「農水省も出かけて、そこから来ているところが、かなり居るんです」

山田（俊）「あると思う」

山田（正）「それはね。それはカタカナの何処か得体の知れない会社だけど、調べようと思っても中々調べ切れないでいるんです」

山田（俊）「そうですねえ」

山田（正）「それを明らかにして貰えませんか」

山田（俊）「う～ん」

山田（正）「そうしないとね、今迄、農水省で真面目に農業者の為にといった連中が、企業サポートの連中がどっと農水省の役員で入って来ているんですよ、今」

水島「うーん…」

山田（正）「その連中は自民党の先生方に対しても、駄目だとしているんですよ」

山田（俊）「うん」

山田（正）「言わせないんです」

山田（俊）「うん」

山田（正）「質問もさせないし」

水島「ああ、だから、本当にね、天下りから何から色々関係があつてということなんだろうけども、とにかく、こういう状態だということは、みなさん、お解りになったと思いますが、鈴木（傾）さんは今のお話を伺っていてどうですか」

鈴木（傾）「あのう、実は、昔、よく覚えているのが千九百九十何年かに、冷作で、冷作で、日本…」

水島「はい」

室伏「1993年ですね」

鈴木（傾）「えーとねえ」

室伏「ありましたね」

鈴木（傾）「いや、ありましたよね。ああ、1993年の、あのう、まあ、それ、米騒動って言われているやつなんですけど、冷作で日本の米が採れなかったと」

水島「ああ、ありましたね」

鈴木（傾）「大変だというんで、それで記録的な冷夏だったので大騒ぎになったと。その時に、私は東南アジアに居て、全然、日本に帰ってこなかったのが外から見ていたんですけど、あの時、日本はどうしたかと言うと、もう米が無いからタイから米を…」

水島「そう、タイ米を輸入しましたね」

鈴木（傾）「ええ、タイ米を持って来ましょうと」

葛城「そうだ、長いお米が入ってきましたね。ええ」

鈴木（傾）「そうなんです。その頃、私はタイに居たんですよ。それで、ああ、日本人が、この上手い米を食べてくれるんだと思ったら、そうじゃなくて何か不味いから捨てるとか…」

水島「そうそう、そういうね…」

鈴木（傾）「何か言い出して、もう、こんなのは食べられないから捨てたとか、何か、そういう話で話題になったと」

室伏「それ、貰っていましたが、大学3年で（笑）」

鈴木（傾）「（笑）」

水島「昔の外米っていう意識だね」

鈴木（傾）「ええ」

水島「外米は不味いっていうのがね」

鈴木（傾）「ええ。それって…」

水島「うん、タイのは一応、いい米だったんですよ、あれだってね。本当は」

鈴木（傾）「はい。タイにも色んな米があって、カオホンマリっていう米があるんですよ、これは香り米ですけど、凄く美味しいんですよ。タイ人が態々美味しい米を、日本人に食べさせてあげたいと。日本人が困っているから食べさせてあげたいっていうんで出したら、日本人の方は何だこの匂いはって、もう全然、今迄食べた米と違うっていうんで、捨てちゃった訳ですよ」

水島「そうなんですね」

鈴木（傾）「だから、そういうのを見て来たんで、やっぱり、食糧自給率が下がったから、じゃあ、米をそのまま持って来ればいいやって、もう、そういう話じゃ無いっていうことは、あの時、1993年の時点で、もう分かっているはずなのに」

水島「全くそうですねえ」

鈴木（傾）「それで今の備蓄率も結構、低くて、先程、室伏さんもデータを出していましたが、もう全然、備蓄が足りない。自給率も足りない。28%」

室伏「穀物自給率は28%です」

鈴木（傾）「はい。そのぐらいですよ。だから日本って、その間、一体、何をしていたんだっていう話ですよ」

水島「いや、だから悪いことだけ、どんどん進めていたっていうね。（苦笑）」

鈴木（傾）「（笑）」

水島「そうなっちゃいますよね」

鈴木（傾）「そうですね。だから、結局、あの頃から備蓄は出来ていないと」

水島「はい」

鈴木（傾）「あの頃から、もう30年ぐらい経ちますけど…」

水島「そうですね」

鈴木（傾）「今年で丁度、30年です」

水島「う～ん」

鈴木（傾）「備蓄できてないし、異常気象で、もうこれから、どんどん輸入とか厳しくなるのが分かっているのに何もしなかったと。こういう状況だから、まあ、鈴木（宣）先生もおっしゃっていますけど、有事になった時でも、もう日本はやっていけないぞと」

水島「はい」

鈴木（傾）「そういう状況ですよ。あと、ひとつ言えば、市場原理主義っていうのは食糧に関しては、もう絶対に凄いリスクになるので認めちゃいけないという、そういう教訓があった訳ですよ。それは全然、生かされていない。むしろ、どんどん悪化しつつあるというのが…」

水島「そうですね」

鈴木（傾）「はい。それと、先程、為替の話をしていましたけど、2012年に日本の円って70円台だったんですよ」

水島「そうですね。円高の最高に高い時ね」

鈴木（傾）「はい。それで何で覚えているかって言うと、丁度、あの時、民主党政権で3年続いて、日本がガタガタになって、もう日本は終わりだと思って絶望して、もう日本は終わりだし、その自分の資金を日本円として置いていたら日本が駄目になった時、逆に、物凄い円安になるだろうと思って、自分の資産全部をドルに換えたんですね（苦笑）」

一同「（笑）」

鈴木（傾）「それで2012年は、70円代っていうのを覚えているんですよ。それから、ずうっとドルのまま置いてたんで、今140円ですから2倍になっている訳ですよ。あの頃の日本って結構、円高になっていたせいで、色々買えるわって外国から買えばいいっていうのは、あの頃に丁度、芽生えたような気がしますね」

水島「そうなんですよ。何でも買えばいいっていうね」

鈴木（傾）「はい。だから、それが今になってアダになっているんだろうなという、まあ、そういう気はしましたね」

水島「まあ、そうですねえ。葛城さんね」

葛城「はい」

水島「今、新聞に報道されていなかったということ踏まえてどうですか、本当にねえ」

葛城「何か、もう知れば知るほど…」

水島「とんでもないね、これ」

葛城「知れば知るほど、生産者と直接、繋がっていないものは怖くて食べたくないなあっていう気持ちが強くなりました。そういうことを何か本能的に感じとっているのか、結構、今、私の周りの友人達が田舎に移住して半農半何とかみたいな暮らしを始める人が増えてきているんですよ」

水島「ああ、今、そういう人、増えていますよ、今。うん」

葛城「増えてきているんですね」

水島「ああ」

葛城「それで、まあ狩猟仲間でも、私は林業に関係する仕事を長くやって来たことがあって、鹿が増え過ぎて林業者が悲鳴を上げているのを見るに見かねて自分もハンターになったんですけども、実際、東京都の桧原村っていう所で巻狩りのグループに参加するようになったら、若い人達が肉を自給したいっていう理由で狩りを始めているっていうケースがいくつもあってビックリしたんですね」

水島「ああ」

葛城「それぐらい何か自給しなきゃという意識に芽生えている若い人達も増えているんだなあっていうことも、ちょっと驚きと共に嬉しさも感じながら実感しました。先程の水島さんの話でね、食育の大切さってことを言っておられたんですけども、私は、明治神宮の武道場で長く青少年自然塾っていう子供達に自然の事を伝える係をやっていたんですが、そこで神道の世界では食前感謝っていうのがありまして」

水島「うん」

葛城「こういう言葉を唱えるんですよ。『たなつもの桃の木草もアマテラス、日の大神の恵み得てこそ』まあ、『たなつもの』っていうのは枕詞みたいなものですけども、色んな植物達っていうのも、天照大神、つまりお日様の恵みを得てこそ、こうやって育ててくれて、私達が生かされているんだよということに感謝して、それを唱えてから『いただきます』と言うんですけど、やはり、そういった教育を取り戻さないといけないかなあっていう風に思いました」

水島「うん。全くそうだねえ」

葛城「桧原大物クラブでも1頭、鹿とか猪が獲れたら必ず、その心臓の一部をカットして、その辺の木にプスッと刺して、山の神様への感謝として捧げているんですね。で、この日本人が本来、持っていた自然観、価値観、命を与えて戴いて、私達を生かしてくれる自然、一木一草にも感謝するっていう日本人本来の価値観を取り戻していくっていうことが食糧に対する畏敬の念というか、それこそ、室伏さんもおっしゃったように安全保障を考えていく意味でも、食糧が無かったら何も始まらない。国を守れないんですから、その畏敬の念っていうのを取り戻す必要があるんじゃないかなっていう風に思わせて戴きました。はい」

水島「そうだね。これは、昔の話になって来ると思うんだけど、葛城さんの辺りは知らないかもしれないけど、♪米は宝だあ～♪っていう歌を知っていますか」

葛城「ああ、それは知らないですね」

水島「♪植えよ、植えましょ、みんなの為にい～♪ってね。♪米は宝だ、宝の草を植えりゃ小金の花が咲く♪みたいなね。あれ、小学校で教わるんです」

葛城「ああ、そうだったんですか」

山田（俊）「知っていますよ」

葛城「へえ～」

水島「覚えていますね」

葛城「素晴らしい」

水島「だから米っていうのは宝だと」

葛城「うん」

水島「それから、みんなで植えようとかいうようなのが、もう教育の中に入っているね。だから、さっきの神道の食前のね、あのう…」

葛城「はい、感謝の言葉が」

水島「だから、お祈りみたいなもの自体、そういうもの自体が本当に無くなっちゃって、食べ物っていうのは単なる手段になっているっていうかね、命と向き合っているっていう感覚をね、自然と向き合う感じも無くなるっていうのは本当にそこですよ」

葛城「そうですね」

水島「はい。他の事も話したいと思うんだけど、室伏さん、色々知っているので伺いますが、ビル・ゲイツがコオロギを言い出したとかいう噂があるんだけど、一体、コオロギって何処から出たんですか。私も意外と知らないんでねえ」

室伏「まあ、いつの間にか出てきたんで、僕も判らないんですけど、ヨーロッパでもコオロギ、コオロギっていう話を言っているじゃないですか」

水島「ねえ」

室伏「昆虫食っていうコンテキストの中でコオロギが何か特出しをしてきたっていう所があって、所謂、左のリベラル系の人達っていうのは、これから食糧難だから、そうなった時には昆虫を食べなきゃいけないっていう、よく解らない議論で、じゃあ、農業をどうするんですかっていう話をした時に、やっぱり、そこでも農業をやり過ぎると地球は破壊されるからとかね、じゃあ、お前が生きることが地球破壊だろうっていう話ですけど」

水島「そうですね」

室伏「だから、結局、そういう話になるはずなのに何故か自分は生きると」

水島「うん」

室伏「自分は正しいっていう前提に立って、そういうことをやるとなるから、だから蛋白源とか牛も駄目だから、コオロギを食べる、昆虫食を食べるんだっていう話になっちゃっているんです」

水島「昆虫も命だから（苦笑）」

鈴木（傾）「それは10年ぐらい前にWHOだったと思うんですけど、これから人口がどんどん増えていくので、もう農業が危機的になるので、それで、WHOが多分10年ぐらい前に昆虫食をやりましょうとやっていたと思うんです」

水島「ああ〜」

鈴木（傾）「そこから始まっていると思うんです」

室伏「あとは、あの辺りじゃないですか、世界経済フォーラムのダボス会議」

鈴木（傾）「ああ。そういうところが…」

室伏「結構あそこで、色んなよく分からないことが、かなりありましてね」

鈴木（傾）「連携してやっていますよね」

室伏「やっています。だから…」

水島「信州でもイナゴとか、ああいうのを佃煮にして食べる所があったけど、何故、コオロギが出て来るんだらうっていうね」

室伏「うん、だから、そこは不思議なところですけど、もうコオロギ食で何か社会課題を解決するって、たまたまね、僕は今、コオロギ食っていうのを検索してみたら…」

水島「養殖するっていうことですかね」

室伏「ああ、していますね」

水島「ああ、そうなの」

室伏「養殖しています」

葛城「そうなんですよ、だから…」

山田（正）「養殖している所を見に行ってみて来ましたよ」

水島「ああ、そうですかあ。う〜ん」

葛城「イナゴとか蜂の子は天然のものを載っていた訳じゃないですか。コオロギ食は、全く違いますもんね」

水島「なんでコオロギを食わなきゃいけないんだってねえ、あんなものは絶対に食わないよって言ってね…」

室伏「だから、結局、前提条件として農業を守っていくとか育てていく。要するに、それを昔ながらの農業にすれば循環型になる訳じゃないですか。僕は新潟の長岡の山奥によく行って、そこの方々っていうのは自分達の食糧は基本的に自分達で作るし、あと、蛋白源っていうのは狩りでウサギとか猪とか鹿とかを獲って来て、ただ、当然のことながら乱獲なんかしない訳ですよ。人の物資は獲らないので。みんなで獲って、みんなで山分けすると。僕もそれを載いて、一緒にウサギ狩りとかね、僕は追う方で、お手伝いしています。

そこは中越地震ってありましたけど、あの時、道路が封鎖されて、ひと月の間、全く物が届かなかったんですけど、みんな、自分達で食糧を作っているから何も困らなかったという地区ですけど。だから、事程左様に食糧って大事だし、そうやって農業っていうものを上手く自分の生活、生業として、それから自然と寄り添って、運営していくって言うのと、ちょっと言い方が変ですけども、そういうものとして農業とか狩りをやっていくっていうのは当たり前だし。それでね、まあ、要は他の人の食糧まで作るっていうことになると、まあ、中々生計が成り立たないんだったら、別に国がお金を入れなさい、財政問題、財源問題が何も無いんだからって言うところにはいかなきゃいけないのに、何故か人口が増えていくと、これから食糧難になると。天候不順になると食糧難になるから、もう、農業とか畜産業では駄目だからコオロギという。

要するに前提条件が完全に間違っているし、何故、こうなっているんですかっていう事に対する、で、しかも世界的な食糧難っていう話をするんだけど、確かに地球というマクロと言うかグローブで見ればそうだけど、個別の地域では全然、事情が違う訳じゃないですか。そういう時こそ、ミクロで見なきゃいけないんだけど、日本の話を語るのに何故かグローバルではこうなっているんだっていうね、頭の中が何か分裂症状じゃないかっていう風な議論が今、日本で平気で行われているのがコオロギ食とか昆虫食の議論だと思いますよ」

山田（正）「コオロギの養殖とか身近な所でガンガンやっているっていうのは、山田（俊）さん、僕は調べてみたんだけど、凄い補助金が出されているんだ」

水島「ああ、そうですか」

山田（俊）「補助金が出ているのか」

鈴木（傾）「補助金、出ているんです」

山田（正）「うん」

山田（俊）「コオロギの持っている、ほら、稲を食うとかね、みたいなことで、コオロギを駆除する為の助成とか動機づけがあるんじゃないですか」

山田（正）「うん」

水島「そうじゃなくて、あれなんですか」

山田（正）「コオロギ養殖とか」

水島「ああ、養殖ね」

山田（正）「食用にすることについて補助金を出しているんです」

山田（俊）「ああ」

鈴木（宣）「ちょっと、いいですか」

水島「ああ、どうぞ。はい」

鈴木（宣）「ああ、すみません。今のお話に関連してフードテックっていうのを今…」

水島「フードテック」

鈴木（宣）「はい。フードテックを推進しなきゃいけないと」

水島「はい」

鈴木（宣）「フードテックの論理構成として、我々はカーボン・ニュートラルな世界を作らなきゃいかんという要請があるじゃないかと」

水島「なるほど」

鈴木（宣）「こう考えると、今、やっている普通の農業、畜産業は、言っていたように田んぼのメタンガスやら、牛のゲップがね…」

水島「メタンが出ると」

鈴木（宣）「一番の諸悪の根源だったと。それらで地球温暖化の排出ガスの三分の一を出しているんだと。だから、こういう農業畜産をやめるべきであると」

水島「なるほど…」

鈴木（宣）「代わりになる、代替的食糧生産が必要であると。その為には、遺伝子操作技術を使って、その一つは人工肉、培養肉、そして今迄は未だ食べられていなかったコオロギを中心とした昆虫食。それから植物工場、無人農場、ビル・ゲイツさん達が言っているような、農家の皆さん、もう出て行って下さいと。ドローンとセンサーを張り巡らして自動制御で機械を動かして、一番儲かる農業モデルを作って投資家に売ればいいじゃないかと」

水島「なるほど」

鈴木（宣）「で、そういう話が出てきていて、この話を繋げて、これは、とんでもない理屈だなあという風に言うと、いや、陰謀論だとか言う人が居る訳ですよ」

一同「（苦笑）」

鈴木（宣）「でも、私もフードテックとして世界で進めなきゃいけないと。それで、日本が特に、このフードテックの、今、言ったような話への投資が遅れているから、これを取り戻す為に、今、どんどん政策を注ぎ込まなきゃいけないというのが日本の国策になっている訳ですよ」

水島「う～ん」

鈴木（宣）「正に、これは陰謀論ではなくて、一部の企業の皆さんの次の儲けどころ」

水島「そうですねえ」

鈴木（宣）「儲けさせてあげられる為に、今ある真面な農業や畜産を悪者にして…」

水島「そうですねえ」

鈴木（宣）「それに変えていかなきゃいかんというね」

水島「う～ん」

鈴木（宣）「これは本当に陰謀論どころか、もう陰謀そのものですよ」

水島「う〜ん…」

鈴木（宣）「という論理がもう一つ明らかにあるということですね、はい」

水島「なるほどね」

山田（正）「正に、私が大臣の時に、植物工場に凄い予算がついていたんです。それを全部、僕はカットしたんです」

水島「うん」

山田（正）「植物工場は企業の自分のリスクでやればいいと」。

水島「うん」

山田（正）「所謂、農地に根差した農業にこそ、農水の予算を使うべきだという形でやったんですがね」

水島「いや、実際、その自然の恵みというね、さっき葛城さんが言った蜂の子とかね」

葛城「はい」

水島「イナゴはっていうことを一例として言ってくれたけど、また、陰謀論って言われるかも分かんないけど、今、私達が見ていると、コロナとか、これを言うとバンされるから。今、何でもバンされているんでね、2週間、動けなくなるっていうことがあるんだけど、こういうようなものも結局、結果として見ればっていう言い方をするけど、公衆衛生も商売になるっていうね、国際的な製薬会社にとっては物凄くいい商売になるから、さっき戦争が儲かると言ったけど、このウィルス問題も蔓延すると、もうモデルナっていう会社は小さい会社だったけど、今は世界的な超大企業になっちゃった。

こういうようなことで、戦争と公衆衛生、じゃあ、次は今、山田（正）さんがおっしゃるように、今度は食糧が国際的な地球規模でのビジネスになっていくという。だから、本当にモンサントとか、そういうね、ああいうものだけじゃない、あとはバイエルか。あれは、くつついちゃいましたけど、こういったようなものが実際は世界中の管理をする。

それも自然にそぐわないコオロギなんかを養殖するんですか、とかね、それと、もう一つ我々が言わなきゃいけないのは脱炭素っていうのは、脱炭素って言っているけども、それで自然エネルギーって言っているけども、原発の再稼働っていうのもね、今、みんなが、反対している訳ですよ。そういう人達はね。

アフリカとか南アメリカっていうか開発途上国、所謂、グローバルサウスと言われる人達が工業国になっていくとか先進国になることを、脱炭素によってエネルギーの管理によって、永久に、つまり先進七か国にならないような状態を、今作っているとも言えるみたいなところを、私は指摘しているんだけども、本当に、この食糧まで、人間の命の、所謂、遺伝子から何から健康の問題と食糧の問題まで、ついにその管理を行き届かせ始めた。

だから、これは極めて、さっき折本さんが言ってくれた食糧安保というか安全保障の問題で、私はアメリカのトマホークを400発買ってね、5年後に納入っていうのよりは、むしろ個別の農業保障というようなことぐらいに農業をちゃんと育てるっていう方が、本当

の具体的な安全保障になるような気もしているんですけど。あの折本さんの、さっきの表は結構、ショックだったんですが、どうですか」

折本「ああ、そうですね。今、お話を伺ってまして、やっぱり農業を守るって言うても、どういう農業を守るのかという、やはり中身の議論をしなければいけないのかなと思いました」

水島「そうですね」

折本「よくカロリーベースの食糧自給率って言いますけど、結局、カロリーを摂ればいいのかって言う話にもなってしまう訳で、じゃあ、例えばコオロギを食べればいいのかとか、或いは食糧自給率を上げるんだったら、例えば遺伝子組み換えでもいいのかとか、或いは大企業にやらせて儲かる農業をやらせればいいのかとか、或いは大企業の中で外国人にやらせればいいのかとか、結局、単に農業を単なるカロリーベースだとか、1GDPとしての一要因として見なしてしまうと、中身の議論が疎かになってしまうっていう問題があると思います」

水島「そうですね。うんうん」

折本「その上で、じゃあ、日本の農業ってどういうものなのかって考えた時、やっぱり、先程議論の中であったように、伝統であり文化であり、或いはそういう自然そのものが、やはり農業であって、昔の社稷という言葉があって…」

水島「ありますね」

折本「その土地の神様と、あとは穀物の神様。土地と穀物に対する信仰と、農業を中心としたひとつの共同体によって、人々が家族を中心とした、そういう独立した小農ですけれども、そういった人達の相互扶助の中で、ひとつの共同体を守ってきたっていう、そういう国柄があると思います。

ですから単純に自給率を上げるっていう議論だけになってしまうと、じゃあ、もう外資を入れて、どんどん儲かる農業をやって生産性を上げてみたいな話になってしまうと、返って本末転倒の議論になってしまうのかなあという気がしました。

ですから、日本の国柄に則した農業の在り方っていうのは、いかなるものなのかっていう議論をする必要があるのかなという感じがしましたね、はい」

水島「だから、実際に今迄の農村がどんどん寂れていく」

折本「はい」

水島「各都市もそうですけども農村という共同体が殆ど崩壊し始めてね、まあ、ちょっと、あるところで聞いたら、つまり田植えはみんなですべてやっていたと。6月1日は鈴木さんのところ。2日は山田さんのところとか次は田中さんのところって、集団で一気にやる」

折本「うん」

水島「集中して出来るから、それで、お互いにコメの作付けから稲刈りまで、全部、助け合ってやれるというような共同体が無くなったから、今言っているのは和歌山県で聞いた話ですけれども、今、チャンネル桜ではフォローしようと思っています。あそこには、み

かんの農家がある。ということは1年中やるより、まあ、勿論、草を刈ったり剪定したり色んな事はしなきゃいけないけど、一番大変なのは刈り入れ」

折本「うん」

水島「これは時間が決まっているから過ぎても駄目だし、早く採っても駄目。ということは、そこにウツと人が行かなきゃいけない。昔は、じゃあ、あの山は明日、誰さんの山とかいうことでやれた。今は出来なくなっている。ということは何かって言ったら、外国人労働者を入れなきゃいけないというような形になって、その農村の共同体とか食べ物を作る人達も外国人に頼らなきゃいけないようになってる。

つまり、共同体のつくり方が変わっているんですよね。私は和歌山に行って色々なことを知って良かったと思っています。紀州ミカンってあるじゃないですか。同じ種類のミカンでも山によって全部、味が全然違う。米もそうでしょうけど。あれは、その通りだなあと思うけど、日の当たり方とか場所の傾斜とか土の質とか、和歌山紀州ミカンでも全然違うって」

折本「(頷く)」

水島「ずらり並んでいるのを見て、ミカン農家の人にどれが一番、美味しいんですかと聞くと、ああ、これだよって言えるんですよ。凄いなと思っただけ。やっぱり、こういうものを村でみんなで作った時代ということとか、もっと言えば60万人ぐらい引き籠りの人も居るし、60歳を超えて定年になった人でも元気な人は、私みたいなのはいくらでも居るんでね。本当は、そういうことを、色んなもので共同でやれるような日本に変えていかなきゃいけない。その農業っていうものを愛せるようなね、誇りを持てるような、それで言ったのは、さっき、山田(正)さんがおっしゃったように、食べていけなきゃ駄目だということですね」

山田(正)「そうですね」

水島「うんと儲からなくてもいいけども、少なくとも生活出来る、米をちゃんと作っていたら生活できる農家じゃないと駄目じゃないですか」

山田(正)「それとね、もう一つ、大事な話があるんです。種ですよ」

水島「ああ、種ね。そう」

山田(正)「ね。自家採取。種採りっていうのは、もう、それこそ私の生まれた時は、みんなが種採りしましたよ。特に戦争中、生まれましたからね、米の種なんていうのは、あれで100年間、生きています、粃で。だから俵に詰めて、一番、裏の部屋に大事にとってあったんです」

水島「ああ、そうですねえ」

山田(正)「その種のいいものを残して、それを植える。そして更にという、この循環が農業です。ところが今回、その種を自家採取禁止。例えばシャインマスカットとか、あまおうとかいうような育成者権が海外に出て行っているから、その為に自家採取、農家の種採りを禁止すると。これの取り締まりが、いよいよ始まるんです」

葛城「う～ん…」

山田（正）「去年の12月12日だったんですけども、農水省は自家採取禁止の法案を作ったけど、それに対する監視、取り締まりの機関を今年中に創ると言って、今、準備を始めたんですね。いいですか、登録品種を自家採取したら10年以下の懲役」

水島「ああ～おかしいねえ…」

山田（正）「1千万以下の罰金。共謀罪の対象」

水島「う～ん…」

山田（正）「これは去年の4月から自家採取禁止法案。でも国会で、こういう自家採取禁止をしている国ってのは何処なのか聴いて貰ったんだけど、そういう国は、日本の他に何処かあるんですかと。無いはずですよ」

水島「それは無いでしょ」

山田（正）「ところがね、農水省がイスラエルと日本ですって答えたんです」

葛城「へえ～…」

山田（正）「いよいよ、世界に例のない取り締まりが始まるんです。もう早ければ、今年の暮れから。今、全農とか政府がそういう機関を創っているところです」

山田（俊）「ああ」

山田（正）「僕は色々調べているんですけども、それに民間の弁護士も入れて、JAさんに今現在、農家が登録品種をどれだけ作っているかと調べさせているんです。いよいよ取り締まりを始めるんです。これはね、例えば登録品種の農家は10%も居ないから、心配は要らないと言ったけど、実は、農水省自身が調査して52.4%の人が登録品種の自家採種していることが明らかになったんです」

水島「そりゃ、そうでしょう」

山田（正）「この審議の参議院で、最後に国会議員の森裕子さんが、これを暴露したんだけど、農水省は10%足らずの農家にしか影響が無いって言うけど、実際、本気で取り締まりをしたら半分以上の農家が罰せられるんじゃないかと。申告罪でも何でもないので、いきなり逮捕できるんですよ。民事の損害賠償も含めて。それで審議が何回も止まったんだけど、やっぱり多数で自家採種の禁止が通ってしまったんです」

水島「何か、もう、江戸時代の百姓虐めっていう感じだね、本当にねえ（苦笑）」

室伏「結局、種苗法の改正の時の議論というか世論って、シャインマスカットを作っている農家さんとか、そういうところすら、本当の改正の中身を全然、分かっていなかったんですね」

水島「ああ～」

室伏「いや、その韓国に行った、中国に行った…」

水島「うん、盗まれたってねえ」

室伏「それを、これで防げると言うんですけど、申し訳ないんですけど、この法律じゃ防げない訳じゃないですか」

水島「うん」

室伏「だって、国を物理的に超えたら止められないですから」

山田（正）「そうだった、国会でも聞いたんです」

室伏「ええ」

山田（正）「実際に日本の農家からシャインマスカットとか、あまおうとか色々な育成者権が海外に流出したことがあるのかと。そうしたら農水省は、それについてはありませんと答えているんだ。それでいて、じゃあ、何故、農家の自家採種を禁止するんだと言うと、答えられないんだ。それでいて、この法案を通しちゃったんだ」

室伏「立法事実が無いのにやったってということですかね」

山田（正）「そうそう」

水島「ねえ…」

山田（正）「だから、そこは議事録を読んで下さい」

室伏「はいはい」

山田（正）「ね」

水島「はいはい、まあ、ちょっとね…」

山田（正）「だから本当に大変なことが今、日本で始まろうとしているんです」

水島「いやいや、みんな、完全に農業潰しですよ」

山田（正）「農業潰し」

水島「それで金まで払わされるようになったら、やる気が無くなっていくしね」

山田（正）「そうそう。しかも去年の農家の自殺者は、これまでで一番、多いんです」

水島「なるほどねえ…」

山田（正）「だから、今、農業は本当に大変な状況です」

水島「なるほど」

山田（正）「それを益々、これから大変なことになろうと」

水島「う～ん。山田（俊）さんね、やっぱり農協っていうね…」

山田（俊）「はい」

水島「そういう全農っていうのは、やっぱりお百姓さんの中心だったじゃないですか」

山田（俊）「ええええ、ええ、そうですね」

水島「一応、協同組合ですから、守るっていう形になっているけど、今、もう全然、守れる状態じゃないんですか」

山田（俊）「う～ん。いや…」

水島「各地域別の農協とか色々あると思いますけども、全体的に日本の農業っていうね、これも守れなくなっているっていう気がするんだけど、どうですか」

山田（俊）「あのう、おっしゃるように種子の問題とか、それから技術の問題とかね、そういう分野は中々農業者にとっても難しい分野ですよ」

水島「うん」

山田（俊）「だから、そこはやっぱり国がやるのか法制局がやるのか、何処か然るべきところがね、ちゃんと明確な方針を出して取り組んでいかなかったら、それは農業者が一番、困りますから」

水島「いや、よく解りますよ。だって、つまり、それを要求するのは、まあ、私から言うとな国際的な食糧メジャーとか、これを全部、商売にしようというね、コオロギまで含めてね、こういう連中だから、その圧力に、さっき折本さんが言ったけど、我々の従属的な国、属国になっている国が何処まで抵抗できるかというのが問題だったけど、TPPから始まって、結局、我々の国はあの安倍晋三ですらこうなってしまったっていうねえ、我々は、この現実を見なきゃいけないっていう感じがするんですよ。

でも、それにも拘らず、我々は農業を諦める訳にはいかないから、後半、また、皆さんのどうすべきなのかという話も含めて議論したいと思います。一回、お休みします。はい」

一同「(礼)」

## <後半>

水島「はい。後半になりました。後半は、今迄、色々問題点として山田（正）さんの暴露というか、まあ、当たり前の話でしょうけど、我々が知らない話を聞いて、えーっ、ここまでになっているのかという驚きと言うかね、視聴者の皆さんも驚いたと思うんですけども、それと、やっぱり構造改革っていうかな、具体的に言うと、日本の政府がやってきた構造改革から始まっている。年次報告の通りに今、やっていますからね。こういうのを見ると、実際、誰が日本の政治を動かしているか、それから財務省の問題も大分、抵抗あった時に戦ったとおっしゃっていましたが、財務省も、こういう状態でね、やっぱり我が

国独自の、所謂、財政均衡論をやっている訳でもないということも、今、明らかになってきました。

我々は、この番組でも経済討論を何度もずっとやっていますけど、最初の頃は、やっぱり積極財政、財政出動、或いは消費減税とか消費税のゼロとか、我々は言っているんですけども、こういうようなことを言う時、何故、財務省はこんなに頑ななんだと。財政法の問題がありますけれども、そう言った時、やっぱりね、一時、そういう立派なMMT理論を言ってくれる人達も財務省の役人が馬鹿だからだと。それから省益ばかり考えて、出世ばかり考えているとおっしゃっていたけども、やっと今、変わってきました。やっぱり、FRBとか海外の所と密接に繋がっている。こういう中で日本の金融とか財政政策が行われているってということが判って来た。ただ、そう簡単に動くってということじゃないことは分かりますけれども、ただ、だからと言って、このまま日本の農業を滅ぼす訳にはいかないし、日本が滅びる、農業が滅びるということは日本が滅びるってということと繋がっていると思うんですね。

さて、かつては構造改革の以前迄、農協というのは、やっぱり最強の圧力団体として勇名を馳せていたんですけど、最近、全くそういうことを聞かなくなっている。それは、一番事情を知っているのだから、これは今、現状としては農協として、そういう全農というのは、このJAというのはどうなっているんですか」

**山田（俊）**「いや、あのう、それぞれ対農協って言いますかね、地元の農協の場では、共同活動が大変に大事だということだね、みんなが一致出来るんですよ」

**水島**「はい」

**山田（俊）**「ただ、要求米価実現とかね、それから、更には農作物の価格を決定する制度の仕組みね、そういう部分についての国の動きって言いますかね、何しろ国の主張って言うかね、それから国はそれを支えることによって、農業者の力って言いますか地域の共同の取り組みを強めたいぞと。それはそれで一致できるみたいな形で、一緒にやって来たっていう風に思うんですが、最近では価格の決定に於いても、それから共同の取り組みによる地域の水田の改廃の問題とか、更には規模拡大とか機械導入とかね、共同の取り決めね、正にそういうことについての取り組みが間違いなく弱くなってきていますね」

**水島**「なるほどねえ」

**山田（俊）**「はい。だから、そういう面で、私は農業者の責任じゃないっていう風に思ったりしますけれども、しかし、その制度なら制度で、それから政治的な動きも含めて、そうした弱い農業者に対する、それから共同の取り組みに汗をかいている組合、農協の役職員に対するサポートって言うのかなあ、動機づけみたいなものをちゃんとやっていかないと、本当に農協は潰れるぞという風に、私がそう思うぐらいですから大変な危機ですよ」

**水島**「うーん、そうですねえ。ということで、やっぱり、農協がね、もう以前に比べると、はるかに力を失って来たというのが現実となると、じゃあ、その農業政策自体をね、どうしていくか、良くする為に、決して日本の農業が繁栄している訳じゃないですからね、農協の衰退と言うよりも解体を含めて日本の農業が解体されつつあるみたいなね」

**山田（俊）**「はいはい」

水島「そういう状況の中で、どうするべきなのかということですがけれども、鈴木（宣）さん」

鈴木（宣）「はい」

水島「色々問題点は前半でも色々出て、ちょっとびっくりするような事実も聞いたんですけども、鈴木さんご自身は、大きな視点で見て、日本の農業の再生っていう中々難しい問題ですけど、どうお考えになっていますか」

鈴木（宣）「はい、ひとつは政治の力で国政がどう動くかっていうことがありますけど、それを動かすためには、ここまでも議論があったように地域レベルでの消費者、住民の皆さんと生産者の関係ですね。そこに共同体を創り直すということが、全てを変えるキーになるんじゃないかと思っています。

アメリカでは日本で今、起こっていることと同じように、遺伝子組み換えでない牛乳、乳製品ですよというような表示をしようとしたら、当局と企業がつるんでそこを潰しました」

水島「なるほど」

鈴木（宣）「でも、アメリカの消費者は負けなかった」

水島「うん」

鈴木（宣）「私達の周りには本物を作ってくれている地元の生産者が居るじゃないかと。だから私達は仮に表示が無くても、その生産者の皆さんと出来るだけ直接的に結びついて、そして確認して信頼できるものを買うようにする」

水島「うん」

鈴木（宣）「自分も手伝って作る。そういう環境を作ったら、私達の命も守れるし、そして頑張っている生産者も守れると。そういうネットワークをどんどん広げていくことに成功しました。それで、この遺伝子組み換えの成長ホルモンを売っていたのはモンサントさんですけども、その力によって、それが中々売れなくなってきたので、結局モンサントさんが、その成長ホルモンの権利を売却しているんですよ」

水島「ああ、なるほどねえ」

鈴木（宣）「どんなに大きな力が私達を蝕んで儲けようとしても、それを、まず根底から打破するのは、特に生産者と共に私達が自分の命を守って、生産者を守って地域での今後は循環させるローカル自給権のようなものをベースにしてね、そこの日本の伝統的な共同体的な力を発揮するという動きが今、出てきていますから」

水島「そうですね」

鈴木（宣）「まず、それを是非、広げていくことによって、学校給食の地元の食材の公共調達も結局そうですね、そういうことに対して地元の政治行政、自治体もまず動いてくれて、市長が、よし俺が1俵2万4千円で有機米を買い取るから頑張ってくれと。いや、うちは4万8千で買い取るから頑張ってくれというような動きも出てきていますので、こういう風な地域でのうねりが、その地域の政治行政を動かす、その広がりが国の政治にも

反映されるということです。色々アメリカに対して一人で戦った先生方は、やっぱり一人ですと潰されますんでね、それだけ面的にそういう人が出て来て動けるようになるから、それを地域から、うねりを作っていくということが、やっぱり必要なのかなと思っています」

水島「そうですね。まあ、丁度、私達もそういう意味での地域社会毎に作るのは、米もそうですし野菜もそうですけど、そういうネットワークを段々創っていきなきゃいけない。今、丁度、おっしゃっていたことは、本当に第一歩かも分からないけども、安全で美味しい食べ物、農産物を作る為にも、それは必要だと思いますね。

それと、やっぱり、さっき、どなたかもおっしゃったように酪農が潰されようとしている。私は北海道でチャンネル桜北海道をやっているから分かるんですけど、本当に絵に描いたように潰そうとしているっていうこともあるんですね。みんなで一生懸命、自分達にしか出来ないチーズを作ったり色々やったりしていたのにね、もう、こういうような形で、本当に無残に商売の、何て言うんですか、売れりゃあいい商品だ、商品だっていうことでね、心を込めたものがやっぱり伝わっていれば、少し値段が高くても買う人は買うんですよ。

というようなことを含めて、まあ、さっき千葉の浦安は農民が居ない所だけど、千葉県全体だったら本当に農業県ですよね」

折本「はい」

水島「この再生っていうのは本当にかかっていますよね」

折本「まあ、そうですね」

水島「実際、首都圏ですから」

折本「はい」

水島「うん。どうですか、はい」

折本「やはり冒頭に申し上げたように、消費がついて来ないと生産っていうのは伸びないということだと思いませんか。ですから、やはり消費者の食に対する意識を高めて行かなければいけないということだと思います」

水島「うん」

折本「例えば、自分達が食べている物を誰が作っているのか」

水島「うん」

折本「やはり、その顔の見える関係をつくっていきなきゃいけないと」

水島「うん」

折本「ただ、やっぱり消費者って言っても、どうしても、例えば有機野菜を作るにしたら、その分、値段が高くなってしまおうと。そうすると全員が買える訳ではない訳ですね。だからこそ、私が重要なのは公共調達が大事だと」

水島「うん、うん」

折本「重要だと思うんですね。その一つの一環が、この有機学校給食とか、まず給食から変えていこうというところだと思うんです。実は、その有機学校給食も今、全国でそういうネットワーク、全国組織も立ち上がっていますし、地方議員連盟とかも立ち上がるとか、もう全国でその取り組みが広がっていているんですね。

例えば同じ千葉県でも、いすみ市とか木更津市とかでは、もう既に学校給食は100%有機米を使ってやっている所もあります。全国でやっているの、私も視察で、いすみ市もそうですし、あとは四国の四万十市とか、そういう所も視察に行っていました」

水島「うん」

折本「その時に気づかされたことは、例えば、いすみ市で言うと、まず生物多様性っていうところから入っているんですね。やはり、それを守る為に、例えば、昔はコウノトリが居ただけでも、化学肥料を使うようになってから、農薬を使うようになってから居なくなっちゃったと」

水島「そうですね」

折本「ですから、そのコウノトリが帰ってくるような水田を取り戻そうというところで、市長さんの意識が本当に高かったと思うんですけど、2015年に始めて2017年に3年目で全量化、米の全量化、有機米の給食の全量化に成功しているんですね。

じゃあ、どれぐらいの費用がかかっているのかって言うと、大体、児童生徒が2千人居る中で4千6百80万円の市の負担で出来たということだそうです。これは農家さんを支える上でも非常に重要なことです」

水島「そうなんですよ」

折本「例えば、大体1キロ当たり430円で買っているそうです。つまり1俵で言うと、大体2万5千円ということで市場価格の倍ぐらいの値段で…」

山田（正）「もっと高く買っているよ」

折本「もっと、ですか、ああ、もっと、ですか」

山田（正）「うん」

折本「ああ、そうですか」

山田（正）「それと、その農家に対して2万円を別途、出しているんです」

折本「ああ。そうですか」

山田（正）「うん」

折本「ああ、なるほど」

山田（正）「だから本当にいすみ市は頑張りましたよね」

折本「はい、そうですね」

山田（正）「7～8年前まで有機栽培農家なんて1軒も無かったんだから」

折本「ああ。そうです。やはり新しく有機栽培を始めたんじゃないくて、観光農家さんを説得して有機米を増やしていったと。だから、やっぱり、そこは行政に対する信頼っていうのもあって初めて出来ることですよ。だって始めて急にやめたら大事になっちゃいますから、だから、それが一つと。しかも、いすみ市は学校給食を無償化しているので…」

山田（正）「無償化している。で…」

折本「はい。だから、もう凄く意識が高い」

山田（正）「うん。東京都の学校給食も今現在8割が無償になりましたよ」

折本「ああ、そうですか」

水島「うーん」

山田（正）「韓国は、もう幼稚園、保育園から高校まで学校給食は全部、無償です」

水島「うん」

山田（正）「無償で全てオーガニックです」

折本「はい」

山田（正）「公立の病院とか老人ホームも今、全部、有機食材ですよ」

折本「うんうん、うんうん」

水島「それはいいですねえ」

山田（正）「世界はそうになりましたよ、ブラジルもそうだしEUも段々そうになってきましたね。EUは、あと7年で農地全体の25%が有機栽培になるんです」

折本「う～ん」

山田（正）「日本は未だ0.6%」

水島「ああ…さっきのねえ、千葉のいすみ市の例でやれるんですよ」

山田（正）「そうそう」

水島「どうぞ続けて下さい」

折本「浦安も大体、児童・生徒が約1万2千人居るので、約6倍の規模ですね。単純計算しても5千万円ぐらいで有機給食は市の負担で出来るという話になるので、これはもうはっきり言って、自治体の首長さんとか行政さんの決断次第だということだと思います」

水島「そうだね」

折本「そういうことだと思います。ただ、やっぱり地方自治体にも財源の限りがある訳です。別に通貨発行権がある訳じゃないですから。だから最終的に本来は、こういうことも国がやるべきことだと、私は思うんですね。地方だって貧しい所では、それが出来る訳はないので」

水島「うん」

折本「鈴木（宣）先生にも以前、お話を伺ったら、例えば5千億円ぐらいあれば…」

山田（正）「それで無償化出来る」

折本「全国で無償化が出来るっていいことですかね」

山田（正）「そう」

折本「はい。そうですね。例えば、学校給食で出す食糧、公費で無料にしたら約5千億円で出来るという話ですので…」

山田（正）「5千億、かからないぐらいで」

折本「はい。だから単純に国が農家さんから有機米だとかを高く買い取って…」

水島「買って置いてね」

折本「それで地方に財政で措置をして、地方自治体が学校給食を有機米給食で提供出来るようにすればいいということだと思います」

山田（正）「世界各国がそうになってきたんですよ」

折本「はい」

水島「いや、だから出来るんですね」

山田（正）「うん」

水島「やろうと思えば出来るっていうね」

山田（正）「出来る」

折本「はい」

水島「今言った様に、学校をそういう状態にしていく」

折本「はい」

水島「有機米のね」

折本「はい」

水島「それから今、山田（正）さんがおっしゃったように、老人ホームとか色々な公共的なね、浦安で言えば、ディズニーランドの米を、みんな有機米にしてとか…」

折本「はい」

水島「大変、美味しく安全な米だということで使って貰うとかね」

折本「そうですね、はい」

水島「あそこには何十万人も来る訳だからねえ」

折本「はい。浦安も実は…はい」

山田（正）「公共調達で3割高く買えば、有機農業は一気に進みます」

水島「ああ、それはいいですねえ」

山田（正）「はい。今回、無償化が非常に進んでいるんです」

水島「ああ～」

山田（正）「まあ、野党の立憲と維新が無償化法案を先の国会で出したんだけど、自民党もそれを受けて、どうやら前向きに検討しているようです」

折本「ああ」

水島「う～ん…」

山田（正）「去年の10月26日に行われた学校給食を無償有機でやろうという大会に全国の市町村長さん達が40人、集まったんです。そこにJAの組合長さんも7人、来てくれたんです。山田俊男さんも来てくれてね。その時、それが終わった後、二次会で、これはもったいないから、ひとつ、JAの組合長さんとか市町村長、それと生協、パルとか生活クラブの理事長さん達で全国的な組織を創ろうじゃないかと」

水島「うん」

山田（正）「全国オーガニック給食協議会っていうのが6月に出来上がったんです」

水島「ああ、そうなんですか」

山田（正）「はい」

水島「ああ、それはいいですね」

山田（正）「そこに、今、35の市町村長が入ってくれていますが、今、どんどん入ってくれている」

折本「なるほど。はい」

山田（正）「JAも28のJAさんが入っているの」

山田（俊）「入っているでしょうね」

山田（正）「これね」

水島「いやあ…」

山田（正）「だから面白くなりましたよ」

水島「そうなんですよ。前向きの事も今、言ったように千葉県は特に農業県だしねえ」

折本「はい、そうですね」

水島「それは子供達にとっても安心だし、親にとってもそうだしね」

折本「そうですね。はい」

水島「もっと言うと、私なんか段々年齢もいっているからね、給食で作った米をね、開いている時間に米を焚いて貰って配ることも出来る」

折本「そうですね」

水島「有機米を沢山作ってね。普通のホカホカ弁当とかああいうのより、心持ち高いけどね、そういうことをやったらねえ、本当に、みんなで一個ずつやっていくと何か広がる感じがしますよね」

折本「そうですね。しかも、実際に食べている側、それは市民が、生産している畑であったり水田であったり、あと里山ですね、そういうところに、例えば子供達が行って、農業体験をしたり昆虫採集したりとか、そういう中で、やはり農家さんに対する意識。感謝であったり尊敬の念を抱いたりとか、あとは土地の祭りに触れてみたりとか、それが一つの地域起こしにも繋がると思います」

水島「そうですね」

折本「やはり就農人口を増やすということにも繋がっていくんじゃないかなという風に思いますね」

水島「うん、思いますね」

山田（正）「そう。特に若い人達は今、有機栽培とか自然栽培でやろうとしているから」

折本「そうですね」

山田（正）「それを3割、高く買ってくれば…」

山田（俊）「ああ、そうですね」

山田（正）「ね、それだけでも食べていけるんですよ」

水島「あと高々5千億って言うと失礼だけどね、5千億でやれたら大したものですよ」

折本「そうですね」

水島「そんな無駄なトマホークを400機、買うよりね」

一同「(笑)」

水島「よっぽど、そっちの方が安全保障になるって、私は核武装論者ですけども、ほんとに今言った食糧をね…」

山田（正）「そうそう、それで…」

水島「健康にさせるっていうのは一番の防衛ですよ」

山田（正）「そうですね。それと、どうしてこうなってきたかということがあるんです。ひとつは2000年に入って、我々は民主党政権の時に、これまで日本は、明治維新以来、中央集権国家だった」

水島「うん」

山田（正）「ところが戦後の憲法では地方分権ですよ。本当の地方分権。その為に、これまで中央政府は各自治体、例えば都道府県とか市町村に対して指揮・命令・監督してきたことを地方分権一括法で全て禁止したんです。通達禁止、過去の通達も効力、失ったんです。そして地方自治体と国とは今、法律上、同格なんです」

水島「うん」

山田（正）「だから、ある意味、地方で国が種子法を廃止しても、我々がみんなで、日本種子（たね）を守る会の萬代さんとか組合長さん方と八木岡さんとか、みんなで地方を回って、地方が独自に、これまで通り、例えば、まあ、千葉県なら千葉県も出来ましたよね」

折本「種子条例っていうのが出来ました」

山田（正）「うん。種子条例。千葉県が責任を持って、これ迄、国の種子法でやって来たのと同じように、ちゃんと種子の検査をして、発芽率90%以上、それを切ったら補償もします。そして県民の税金で作るから安く3年がかりで色々な種子を提供しますという条例を、国が廃止したのにもかかわらず、地方自治体だけで現在34の道県で出来たんです」

水島「う～ん。なるほどね。そういう意味での地方の自立的な動きっていうのは良い事だと思いますね」

折本「今、おっしゃった話もそうですし、あとは、先程、議論になった食品表示に関して、例えば遺伝子組み換えを含まない限り遺伝子組み換えでないっていう表示が出来ないということで、事実上、殆どのものが遺伝子組み換えではないという表示が出来なくなってしまったという現状がある中で、例えば千葉県独自の食品表示条例みたいなものを作って、ゲノム編集であるとか、あとは加工食品だとか、そういうものに関して、しっかりちゃんと要件を厳格化して表示義務を課すというような形で、とにかく…」

山田（正）「表示をする。それは出来るんです」

折本「そうです」

山田（正）「例えばね、愛媛県の今治市では、こういう条例を作っています。今治市の承諾なくして遺伝子組み換えの農産物を作ったとしたら、その作った者は半年以下の懲役、もしくは50万円以下の罰金に処す」

水島「凄いですよ」

山田（正）「ね。こういう条例を、例えば、千葉県で食品表示について、浦安市の条例でもいいんです」

折本「はい」

山田（正）「浦安で流通するものについてはね」

折本「うんうん、うんうん」

山田（正）「ゲノム編集なり遺伝子組み換えなり表示しなければ罰金にするとかね」

折本「うんうん、うん」

水島「ああ、いいですね」

山田（正）「或いは、残留農薬の基準を浦安市独自で決めることが出来るんです」

折本「はい、そうですね」

山田（正）「例えばラウンドアップのグリホサートは小麦で30PPMまで」

水島「ああ、そうですね」

山田（正）「日本は世界一緩やかでしたけど、中国は0.2～5%ぐらいですからね、ラウンドアップで中国の150倍も緩めたんです。それを浦安は前の通り0.5%にすることは出来るんです」

折本「うん、なるほど」

山田（正）「今の地方分権では」

折本「ああ、なるほど。いや、是非、そういうものはやるべきだと思いますし、やっぱり、その消費者に選択する権利っていうのを保証しなきゃいけないと。今、選ぶことすらできない状況ですからね」

山田（正）「うん」

折本「はい」

水島「そこは凄く大事で、そういう具体的なことをやっていくと、他は普通に反対できないでしょう。真面なあれだからね。消費者にとっては知りたいし、ゲノムの話とか遺伝子組み換えも知りたいっていうことある訳だから、当然、そういう形でやってくれるといいですけど、我々が前にこういう議論した時にあったのは、北海道のね、北海道産大豆、納豆が物凄くラウンドアップとかいうものの影響になっていたっていうね」

山田（正）「そうそう、そう」

水島「私なんて、ずう～っと納豆、好きだから、国産の納豆だから食わなきゃってね、げえ～、一番、やばかったとかね、まあ、今は、どうか判りませんよ。いい加減なことは言えないけど、そういうことを考えたら…」

山田（正）「今、ホクレンはやめましたよ」

水島「ね」

山田（正）「ラウンドアップの使用」

水島「はい、やめましたね」

山田（正）「収穫前的大豆に対して」

水島「っていうようなことなんでね。今言った具体的なことを、一步一步進めていくっていうのは凄く大事なことだと、皆さんお解りになったと思いますけど、室伏さん、この流れの中で、どうですか、これから、どうやって行くかって言う事ですけどね」

室伏「うん、あのう、ちょっとね、回って来たんで、じゃあ、僕、さっきフリップを出さなかったので出しますけど、結局、現状はどうなんですか。これは、まあマクロの大きな

話になっちゃいますけど、結局、今、政府がやっていることって、農家が倒産しようがどうしようが支援はしないと」

水島「うん」

室伏「先程、酪農を潰そうとしているかのようにだってことをおっしゃいましたが、そうですね。基本的に政府がやっている農業支援策っていうのは、要は自給力、まあ、自給率という言葉が今度、無くなるということで、まあ、無くしてはいけないんですけど、自給力、自国で食糧を生産する能力を維持していく。農業を持続可能なものにする為に、何を考えているかって言うと、輸出で儲けて、それで何とかしろという話ですよ」

水島「そうですねえ」

室伏「管政権が、それを一気にやりましたよね。輸出用農作物栽培の奨励とか、その一方で自国民が消費する農産物は減産しろとか、あと転作をしろと。要は、米から他の海外に売る作物に転作をしたら補助金をやりますって、こういうのは何て言うんですかって言ったら植民地農業じゃないですか」

水島「全くそうです」

室伏「植民地プランテーションでしょ」

水島「はい」

室伏「だから、要するに農業をやっています。だけど、それは全部、まあ、全部ではなくてもいいんですけど、海外に輸出する物だから自国民が食べられませんと」

水島「はい」

室伏「だから畑はあって緑は豊かなんだけども、自国民は飢えていると」

水島「そういうことです」

室伏「要するにやっていることって、そういうことをやろうとしているんです」

水島「うん、今、やろうとしていますね」

室伏「でもね、具体的に個人名は挙げないですけど、元々農業とか分かっているはずの人間が、いつの間にか農業を持続可能にする為には輸出促進だと」

水島「うん」

室伏「この米が何処で売れたと、この苺が売れたとか言って喜んでいる訳ですよ」

水島「そうです」

室伏「まあ、だから、結局、農業って何なのかっていうことは全然、解っていないという状況になっているっていうことですよ。はっきり言って、米とか豆とか、そういうものは食べなきゃいけないんですけど、別に苺農家がどうこうとか言う訳じゃないんですけど、苺を食べなくなったら生きられる訳ですよ。そうしたら苺は要らなかったら買わない訳じゃないですか。だけど、苺農家は、そうやって売って、香港のスーパーで、これだけで売れるからいいっていう話をする訳ですよ。

そういうことを考えているから、中国はね、これ見たことかって、そういうことを使う訳じゃないですか。だから正に観光客を大量に送り込んで、その国に経済的に打撃を与える為に、観光客行くなかって言って、そこを干上がらせると。もう言う事を聞かざるを得ない状況にするっていうのは中国の手口ですよ」

水島「うん」

室伏「これは前々から僕が引用しているフランスの国防省のレポートの中に、はっきりと書いてあります。これは産経がちょっと紹介したぐらいで、日本で殆ど紹介されてないので、僕は何回も何回も話をしているという状況です。

一方で、この国民ですけど、もうデフレマインドで安ければいい。もう国産が高いんだったら安い外国産でいいじゃんとか、そういう人ばかりじゃないですけど、でも多くの人は、やっぱり、こっちになっちゃいますよね」

水島「うん」

室伏「同じ椎茸が並んでいました。例えば国産のものは200円。中国産のベチャツとしたやつは99円だったら、そっちを買っちゃう人が居る訳じゃないですか。僕は、学生時代に買って臭くてしょうがなかったから二度と買わないですけど、でも、そういう人って稀で、基本的に多くの国民って、こっちになっちゃいますよね。ということになっちゃうと、正に先程、鈴木さんにおっしゃって戴いた、海外から買って来ればいいじゃんという発想に繋がってしまうんだということですね」

水島「そうですね」

室伏「世論に関しても、農家は補助金で保護されていて既得権益だと。あいつらが居るから発展できないんだという風なこと、いや、だから維新がそういうことがありますよね。農協は既得権益団体で、とんでもないとかね。正に維新もそうでしたけど、みんなもそうやって攻撃していましたよ。農協と医師会と電気事業連合会は既得権益三団体みたいな事を言って、平気で、そういう批判をやっていましたけどね」

水島「うん」

室伏「いや、既得権も何もなくて、要は守るべきものだから守るようになって、つまり保護貿易でしょと。保護貿易を壊すっていうことは、どういう意味があるんですかと言ったら、日本を壊すことじゃないですかと」

水島「うん」

室伏「でも、結局、今、こちらは政府の政策ですけど、それを受けてメディアもね、だから輸出して、これが何か香港やシンガポールで売れましたっていう話をするから、みんながこういう思考になってしまうと。今、我々が農業を考える時に、これを前提にするというか、今、こういう惨憺たる状態ですよ。しかも繰り返しますけども、農業を持続可能なものにする為には輸出なんだからっていう間違っただ発想になってしまっていると。だからね、そこから転換というか、それは間違いですよ。農家は保護されていないどころか日本農家は虐げられていますよっていうね、まず、そこから話を始めないといけないんだろなあと思っていますね」

水島「そうですね」

山田（正）「米の輸出で調べたことがあるんです」

室伏「はい」

山田（正）「茨城県で『しきゆたか』という品種を、あるJAが作ったんです」

室伏「はい」

山田（正）「F1の品種です。豊田通商の品種ですね。これを何故、作るんだろうと思って調べてみたら、輸出用に補助金が60キロ1万円出るんです」

水島「ほお」

山田（正）「ね、それで輸出で米も伸びた何も伸びたって言っているんだけど、今の日本の食糧自給率の計算には輸出した分まで入って38%です」

一同「ああ…」

山田（正）「だから、とんでもない話ですよ」

水島「いやあ…」

山田（正）「だから、この輸出が伸びたって言って単純に喜べないんです」

水島「うん…いや、だから本当にプランテーションっていう、所謂、植民地。まあ、だからフィリピンの場合はバナナだったりマンゴーだったりね、もうみんな、そういう国、マレーシアはゴムだとかね、こういう形で、実は、北海道のことでもいつも問題にするんだけど、今、土地がどんどん買われているんですよ。それで何をやるかって言ったら、今、ニトリが北海道の経済の中心ですから、それで本当に中国の出先機関みたいなことをやっているから、土地を買うのはニトリがやると。それで、今、農地も買えるようになっているんです。色んな理由をつければ。

だから、そういう形でどんどんやって、そこで作った食糧を中国に輸出する。だから結局、今、電力もそうですけど、上海電力が今大阪で、他にも何処もみんなやっているんだけど、結局、インフラだけは日本が整備して、それで、いつの間にか合同会社だったのが上海電力に資本を買い取られて、太陽光発電って言っても、その電力で上がって、みんなが税金を余分に払っているんですよ、電気料。

でもそれは、みんな中国がお金、儲かっていく。正に植民地経済を今、外資の導入だとかね、この岸田政権っていうのは何を酷いことをやっているかっていうと、全部、国を売ること、土地から企業から建物から、こういうことをやって、どんどん植民地的な形のね、開発途上国、まっしぐらに今、行っているっていうことですね。

商売やるって言ったら観光だけっていうね、これも正に本当の植民地経済ですよ。そういう流れになって農業が犠牲になっているっていうことだと思うんですけど、葛城さんは、今の話を色々聞いていて、どうですか」

葛城「はい」

山田（正）「鈴木（宣）先生は、カレント・アクセス、ミニマム・アクセスについてNHKで凄く大事な話をされて、これで少し農水省も変わってきたような感じがするんだけど、その辺の経緯を鈴木（宣）先生に聞いて貰ったら、僕は北海道の酪農は生き残ると思うんです」

水島「だから、やれば出来るんですよ」

山田（正）「はい」

水島「農業とか酪農業とかを今、政府が主導で潰しているっていうね。それと、もう一つは、やはり地方自治体の知事さんね。我々はずっと色々な事をやってきているから判るんですけど、例えば、今言ったように、北海道のIRの問題とか大阪のIRの問題。もっと言えば、万博も全部、繋がっている。それからメガソーラーの問題、ソーラーパネルが今、どんどん買われている。さっき、資料を用意しておいてと言っておいたんだけどな、とにかく新聞広告で空いている農地があったら売って下さい。20年の賃貸でもいいですと。

こういう形で、今、どんどん太陽光パネルをやるよとか自然エネルギーだよとか言うと、農地でもどんどん使える。日本の企業を使ったりして、どんどん買い取っているんですね。こういう危ない状況が今、続いている。例えば、中国の一番典型なのはニセコです。あそこは殆ど中国企業が買っちゃった。それで、億ションと言われるような超贅沢なマンションが出来ているんだけど、日本人が買うんじゃないですよ、中国人が入るんです。

だから、今、そういう観光で豊かになったって言うけど土地は値上がりしてね、その土地の人達は2倍、3倍で買って貰える訳だから。でも北海道に何のプラスも無い。観光も何も全部、自分でやっちゃう。前に爆買いの時ね、今、株式が変わったかも分からないけども、ラオックスなんていうのは中国資本だから、中国人がわあ〜と来て、電気製品を爆買いして、買って帰る。じゃあ、何処へ行くかと言うと、ラオックスは中国株ですから全部、中国が儲ける。

こういう状態が今、外資を導入するっていう形で、もうとんでもないのがずっと進んでいるっていうことですね。これが彼らの言う外資導入という形になっていることはね、農地に対してもそうなんです。いざとなつて食糧危機になったとしても、それを押さえられていると、そういうのを持っている所は出しませんからね。そういう危険が食糧安保の問題としても非常にあると思うんですけど」

折本「あ、ちょっといいですか」

水島「はい、どうぞ」

折本「今の話で、農地バンクっていうのがありまして、結局、農家さんも、例えば高齢化して耕せなくなるといった時に、その土地を誰かに貸したいなって思うじゃないですか。或いは、農家をやっている人も他の所で借りて、もっと農地を増やしたいなって思う訳で、その間に入る中間管理機構っていうんですか、農地バンクっていうのがあるんです」

水島「それは、私営企業ですか」

折本「いや、県がやっているの、県が、そういう団体に…」

室伏「それは国の施策ですよ」

折本「ああ、国の施策。はい」

水島「ああ」

折本「何処かに認定して園芸協会とか、そういうのに認定して、そこが主体になってやる訳ですけども」

水島「なるほどね」

折本「結局、農地集約をどんどん推し進めていくっていう形になっているんですね。すみません、それは農地バンクじゃなくて農地ネットっていうのがありまして、要は今、空いている農地、遊休農地になっているようなやつをネットで調べられるようなものがあるんですよ」

水島「はい」

折本「それは本来、新規就農者さんが新しく農業を始める時に何処の農地で農業をやろうかっていうのを、例えば探したりとか、それを紹介したりという話ですけど、実際に聞くところによると、要はメガソーラーとかやっているところが、そのサイトを使って何処の農地が空いているのかっていうのを探し回っているらしいですね」

水島「ああ～なるほどね」

折本「それを見て農家さんに話をして、ちょっと、ここを貸してくれないかって言って、ソーラーパネルをどんどん敷いていくってような悪用がされているっていう話も聞きました」

水島「おっしゃるようにね、ソーラーパネルでやっているのと、北海道は正直言って、例えば、今回、釧路湿原に20万枚のソーラーパネルを張るって言うんですよ。北のオオサンショウウオが絶滅するだろうって釧路市の担当職員が言っている。何故、霧の釧路、それから冬になれば、12月から多分、4月ぐらい迄、雪で閉ざされる。だからパネルの上に雪が被っちゃうから、少なくとも半年近く全く無い。5月から11月迄の期間だって、風が吹いたり雨が降ったりするのに、でも、そこに建てるんですよ。

その土地を確保する為、つまり、もっと言えば、この間、日高線が一部、無くなったんだけど、その場所に何をやったかって言うと、その伊藤組ってというのがね、そういう大手の建設会社。そこが何をやるかって言うと、そこを風力発電やりますと。そういう理由の下に海岸線全部を中国が今、抑えようとしている。

だから裏に隠れているのは、別にパネルで儲からなくてもいいっていう意識が凄くあるんですよ。やるよ、やるよって言えば許可が出るから、どんどん大事な土地を買っている。この間、宮崎県の700ヘクタールは新聞にも出ましたが、都城の700ヘクタールってというのは、後樂園の何個分だっというぐらいの大きさでね。

買っちゃった訳ですよ。実際、何に使うか未だ全然、分からない。でも、そういうような形で和歌山県もそういう理由で、どんどん大事な大阪湾に入って来る軍事的にも非常に戦略的な場所を見下ろす場所にソーラーパネルをやるっていう形で中国がどんどん買っているっていうね、まあ、これも二階さんですからねえ。

だから、こういうことを見ていると、自然エネルギーと称しながら、他の戦略的な目的を持って買っていることもある。農地も恐らくそういうことがあるかも知れない。

それで、もう一つ、これは何度も言っていますが、私が旭川に仕事で行って旭川グランドホテルで泊まった時、中国人が満杯だったんですよ。何故、旭山動物園ぐらいしか観光地が無いのに、こんなに大勢が来ているのって聞いたら、全員、観光もしているけども、投資先を探している」と

山田（俊）「ああ〜」

水島「土地を探しているんですよ」

山田（俊）「ああ」

水島「このぐらいね、例えば、それも日系企業のニトリさんみたいな会社が逆に日中友好商社ですから、それが世話をするという。だから、あまり中国が直接っていう感じに見えないんですよ。というようなことで、もう金儲けの為だったら何でもやるっていう企業が本当に増えている。というか、まあ、仕方がないと言えば仕方がないけど、でも本当に、こういう状態です。今、もうズタズタにされているということが多分、折本さん、千葉でも起こっているだろうね」

折本「そうですね。やっぱり、そうやって農業をやめちゃう人が居るので農地が空いて、そこが、ある意味、標的になって、どんどん入ってきているっていうことだと思うんですけど、先程は消費者の側でどうやって意識を高めていくのかっていう議論があったと思うんですが、やはり生産者をどうやって守っていくのかっていう議論も勿論、重要であって、今の農家に対する支援っていうのは、例えば食糧自給率も、すみません、これも単に農水省のホームページですけども、結局、自給率が低い理由っていうのは、畜産物に関しても外国産の飼料で育てた畜産物っていうのは、要するに自給率に換算しないということでグッと17%まで下がっていると。

あとは、その麦とか大豆とか、そういうところの自給率が非常に低いっていうことなので、こういったところの戦略作物に対して、例えば、その水田を活用して麦や大豆を育てれば、要は補助金、交付金が出ますよっていうようなやり方をしているんですが、ただ、結局、それが十反、十反っていうんですか十反辺りで3.5万円とか額が物凄く少ないと。

しかも水田を活用したら、そういう補助、交付金が出るんですけども、畑作で、自給率を押し下げている要因である麦とか大豆を作っても、今の制度では1円も補助金が出ないですよ。

ですから、それに対する措置が、そういうメニューが無いっていうのが問題だっていうのが一つと…」

山田（正）「それはね」

折本「はい」

山田（正）「水田の活用交付金」

折本「はい」

山田（正）「これに対しては、僕が大臣の時に8万円を出したんだ」

折本「はい」

山田（正）「今、金額は減っているけど、6万ぐらいは出ているはず」

折本「はいはい、はいはい」

山田（正）「これは非常に畜産農家も喜んだし、青刈りでね…」

折本「はいはい、はいはい」

山田（正）「祭礼時にする。米をね、稲を」

水島「はい」

山田（正）「畜産の餌にするという。だから、そういった制度では結構、覚えたんですよ」

折本「ああ、なるほど、はい」

山田（正）「飼料用米、餌米制度も僕が大臣の時にやったんだけど、今、凄い量を作っていますよね」

折本「なるほど」

水島「ああ」

山田（正）「最初は反当たり、10R当たり8万円、出したんです」

折本「あ、今もWCSは8万円、出ているってことですね」

山田（正）「うん、8万円」

折本「はい」

山田（正）「少し下がったとは聞いたけど」

折本「ただ、やっぱり、それでも生活が成り立たないっていうことが問題なので、例えば民主党政権の時の戸別所得補償みたいな形で、あれは標準的な市場価格と生産費の差額分を補填するっていうことですよ」

山田（正）「まず差額を補填する。それに対して10R当たり1万5千円をつけたんです」

折本「ああ、なるほど」

山田（正）「所得補償で」

折本「はい。それが結局、自民党になったら廃止されてしまったということで、一番重要なのは、やっぱり農家さんの所得を補償するっていうことであって…」

水島「そうなんです」

折本「しかも、それも単に赤字にならないよ、というだけじゃやらないと思うんですよ。やはり利益が出るから頑張るってやる訳で、再生産出来ますよとか、これは赤字にはなり

ませんよと、生産費分は補填できますよって言うんだったら、誰もやらないと思うんですね」

水島「そうだよねえ」

折本「だから、せめてサラリーマン並みの給料が無ければ、じゃあ、若者が農業をやって結婚して子供を作ってということ、絶対に考えないと思うんです。だから、その部分では先程、欧米だとかは、もう8割ぐらい農業所得に占める補助金の割合があるって言いましたけども、僕はこの農家さんっていうのは殆ど公務員化してもいいと、それぐらい、やっぱり政府を支出して、それで支えていかなきゃ、もう根本的な解決には繋がらないんじゃないかなあという気がします」

葛城「私が正に、今言おうと思っていたことを折本さんの口からも言って戴いたんですけども、ちょっと話を広げて農林水産業の皆さんというのは、私達の命の根幹を支えて下さっている本当に大事な職業に就いて下さっている皆さんだと思っているんですね。

でも、冒頭、室伏さんがおっしゃったように、何かちょっと下に見られているようなところがあるのは本当におかしなことだと思っていて、本来、敬意を持たなくちゃいけない相手に対して日本人の価値観はおかしくなっちゃっていると思います。

でも、そういった方々に、ちゃんと本来、格好いい仕事をして下さっているですよって、誇りを感じて戴く為にも、そして生活をちゃんと成り立たせて戴く為にも、やっぱり所得補償っていうのはあって然るべきで、公務員と同等に考えていいんじゃないかなあっていう風に私も思っています」

折本「いや、そうですね」

葛城「うん」

折本「先日も何か農業新聞で、新規就農者が過去最低になったっていうニュースが出ていたと思うんです。僕も千葉県の蘇我でやった就農相談会に参加したこととかあるんですけども、最初に聞かれるのが、貴方の貯金はいくらあるんですかって聞かれるんですよ」

水島「ほお」

折本「それで初期投資で、これくらいかかりますよっていう話をされて、例えば、その為に色んな補助金のプログラムも一応、国が設けていると」

水島「うん」

折本「例えば就農準備資金とか、あとは経営開始資金、要は始める時に農業を勉強すると、毎月12万5千円が研修を受ける時に貰えますよ。それは3年間、貰えますよ。勿論、色んな要件はあるんですけども。それを始めた…」

山田（正）「新規就農者に対して15万円」

折本「はい」

山田（正）「月に、3年間、出るっていうのが未だ残っているんじゃないかな」

折本「あ、これも経営開始資金のことですよ。はい」

山田（正）「新規就農資金」

折本「えーと一、新規就農資金は…」

山田（正）「月に15万円が出るの」

折本「えーと、ああ、それも、あるんですか。ちょっと、すみません、把握していませんでした。はい。まあ、要は、準備する時と始めた時には毎月、いくら出ますよっていう話があって、しかも、例えば色々な資機材を導入する時にも補助金は上限で1千万円が出ますよとか…」

山田（正）「うん。ただ問題なのは、新規就農者を、初めてやる訳だから、認定農業者じゃないから出せないんです」

折本「ああ」

山田（正）「最後になるんです」

折本「はいはい」

山田（正）「だから早く認定農業者制度をやめさせんといかん」

水島「うん」

折本「ただ始めるのはいいけど、やっぱり問題なのは持続できるかじゃないですか。だから、例えば、補助金が貰えなくなったあとも何十年も農業を続けていられるんですかっていう見通しが立たなければ、そんな初期投資で、はい、じゃあ、500万円なんて絶対に出来ないじゃないですか。だから、やはり、その見通しってものを国がちゃんと示してあげないと…」

水島「そうだよね」

折本「結局、単に遣り甲斐だけに任せてしまったら、本当に若者の、さっき出たような有機農業を始める人は多いけど、直ぐやめちゃうって話になっちゃうんで、遣り甲斐詐欺みたいな話、搾取みたいな話になってしまうので、そこを、ちゃんと国が面倒を見ると。責任を持って最低所得を補償するっていう、そこはやらなきゃいけないと思いますね」

山田（正）「所得補償は大事です」

折本「はい」

水島「う～ん」

山田（正）「全ての農家に所得補償をする。有機使用も含めて」

折本「はい、そうですよ」

水島「いや、だからね、今、折本さんが言ってくれたけども、今やっている人達を、まず確保するっていうね」

折本「はい、そうですね」

水島「もう、やめようっていうことが無いようにする。その為に所得補償が必要だということですね」

折本「はい、そうです」

水島「それで新規の人達にも、そういう、きちっとした保証を示すっていうこと。これは本当に大事な投資なんですけどね」

室伏「まあ、ただ、あれですよ、今ね、折本さんがせっかく言ってくれたのであれなんですけど、やっぱり農業だけじゃないんですけど交通でもそうですけど、最初はひと押しでイニシャル・コストは補助金を出すんですよ。だけどランニング・コスト、運営費の方には中々金を入れないんですよ」

水島「うんうん」

室伏「これも何でもそうです。だからねえ、財務省の考え方がそうなんです。ちょっと、これ、どういう理屈かっていうのは覚えていたんです。ちょっと、ごめんなさい、パッと今、思い出せないので簡単に申し上げますけど、財務省ってそういう理屈でしかやらないので、だから、そこも問題として、国会なりで取り上げてね、最近、大分、財務省って、財務金融委員会とかで真面に答えられなくなっていますから、あの人達…」

水島「うん、そうだね」

室伏「何か、あわわわわあって逃げちゃうとかね」

一同「(笑)」

室伏「いや、ほんとに、僕、見たんですよ。財政破綻する状況っていうのは何だっていう風に西田昌司先生が聞いたら、いや、ざざざざざざざ、財政があ～って言って逃げたんです。今、そんな状況ですから、これも僕は絶対に詰めた方がいいと思います」

水島「なるほどね。具体的に一個ずつねえ」

室伏「ええ。彼らの理屈はいいんだけど、でも、やっぱり日本の事を考えた時に何が必要なのかという、お金の使い直し、そういうお金の使い方をしなきゃいけないんじゃないですかっていう話ですからね」

水島「いや、今言ったように、こういう具体的なことを言っていくと、やりようがある。色んなことでも、やれば出来るんだっていうことが凄く意識の中になっていくと、もう、雰囲気づくりしちゃっているからね、日本の農業は、もういいんだっていうね、さっき、冒頭に鈴木（傾）さんが言ってくれたように、どう買えばいいんだというようなね。そういうある種のニヒリズムですけど、鈴木（傾）さんは今…」

鈴木（傾）「はい」

水島「どうですか、はい」

鈴木（傾）「まあ、食糧自給率を上げるのは、大前提なんですけども、その為には、やはり農家が儲からないといけない。菅さんは、その為にどうしたかって言うと、やっぱり輸出で儲けるっていう話ですね。うん。だけど、その輸出で儲けることになると、今度は、グローバル企業に取り込まれていく訳ですね」

水島「うん。それはだめですからね、うん」

鈴木（傾）「これは水島社長もおっしゃっていましたが、穀物メジャー達が待ち構えている訳ですよ」

水島「そうです」

鈴木（傾）「はい、穀物メジャーっていうのは、要するに買い付けとか、その流通とか保管といったものを全部、取り仕切って、何処に流通するとか何処に流通させないとか、資本主義の論理で、それを決めていきますよと」

水島「うん」

鈴木（傾）「これって彼らが決めたことで、その国の命運が決まってしまう。ここには出さないとされたら、もう大変なことになります。まあ、要するに武器としての食糧」

水島「うん」

鈴木（傾）「という使い方ですね」

水島「そうですね」

鈴木（傾）「要するに、これはヘンリー・キッシンジャーが言ったんですけども、食糧も武器になりますよっていうね」

水島「うん。その通りですね」

鈴木（傾）「まあ、そういうものですよ」

水島「はい」

鈴木（傾）「この穀物メジャーって言われている5大穀物メジャーがあって、それはアメリカで言えばADM」

水島「うん」

鈴木（傾）「オランダで言えばブンゲ。もう一つ、アメリカでカーギル」

水島「うん。ああ、5つですね」

鈴木（傾）「あとルイ・ドレフュス、これはフランスですね。あとは、スイスのグレンコとか、こういった5大メジャーがあるんですけども、要するにグローバルで見ると、彼らが食糧を握っている訳ですね。巨大な穀物倉庫とかを彼らが持っていたりするんですけども、今、一番、莫大な食糧を保管しているのがアメリカですけども、まあ、このサイロっていうんですけど、このサイロは、彼らが全部握っている訳ですよ。だから、日本がグローバルに出て行くと、結局、彼らに取り込まれてしまう。そして彼らの論理で農業が進められてしまう。まあ、要するに…」

水島「結局、下請けだよな」

鈴木（傾）「(頷く)」

水島「そこの、はい」

鈴木（傾）「まあ、要するに日本が何か決めようと思っても、もう決められなくなってしまう訳ですよ」

水島「うん」

鈴木（傾）「今も実際、そういう風になってきていて、じゃあ、それをどうするのかって言う…」

水島「うん」

鈴木（傾）「逆に日本が、そういう流通とか、穀物メジャーの一角に入っていけばいい訳です。それで頑張ったのが丸紅だったんですよ」

水島「うん」

鈴木（傾）「丸紅はガビロンという会社を買収して、そこに乗り込んだんですけども、結局失敗して、去年売却しました」

水島「ああ…」

鈴木（傾）「結局、日本は穀物メジャーの中に入れなかったっていう現状があつてね」

水島「入れなかったですねえ」

鈴木（傾）「そうすると、グローバルから見ると、日本の農業というのは、そういった5大メジャーに支配されて潰されるような運命になっているんですね」

水島「そういう流れになっているんだね」

鈴木（傾）「だから、政府は保護しなきゃいけないっていうのはあると思いますね。それが出来ていない」

水島「うん。山田（正）さん、どうぞ」

山田（正）「世界は農業に所得補償していますからね。それをやっていない日本が悪いんだけど、ただ、さっきの戸別所得補償だけど、浦安市でも独自にできるんだ。実際に、今年、米価が1万円を切った時に新潟県の胎内市っていうのは市が所得保証した。そういうところが、いくつか出て来た」

葛城「ああ～、私の米粉パンも新潟県胎内市製です」

山田（正）「ああ、そうか」

葛城「はい」

山田（正）「あそこは、よく頑張ってくれている」

葛城「そうなんですねえ」

水島「なるほど」

山田（正）「宮崎県の綾町は、条例でもって学校給食を町の責務として有機食材にする」

葛城「う～ん」

山田（正）「学校の責務として、第6条に有機食材にするという条例を初めて作りましたよ。今年の3月」

葛城「へえ〜〜〜」

折本「どちらですか」

山田（正）「宮崎県の綾町。浦安でも作りませんか」

折本「はい、いいですね」

山田（正）「それはね、これは一気に進みますよ。各市町村でね」

水島「今のところ、やはり具体的にそういうことを一個一個やっていくしか無いけども」

山田（正）「うん」

水島「やれば出来るっていうことだけは分かるっていうね。どうですか、山田（俊）さん。段々纏めにしていかなきゃいけないので」

一同「(笑)」

山田（俊）「いや、本当に大事な議論を詰めてやって戴きましたよね。そして、やっぱり、全体として、きちっと農業者に、ちゃあ〜んと、こんな形で努力が報われるよっていうことだけ…」

水島「そうですねえ」

山田（俊）「そのことだけを、一番、念頭に置いて政策推進をやりたいですね。それじゃなかったら、本当に田舎は壊れると思いますね」

水島「はい」

山田（正）「やりましょう」

山田（俊）「そうしましょう」

水島「はい、ということで、じゃあ、今、一言、戴きましたので、今度は逆に、そちらから行きますので、山田さんから最後に一言」

山田（正）「はい。本当に鈴木（宣）さんに言って欲しかったんだけど、カレント・アクセスとかミニマム・アクセス、77万トン。あれですよ、実際には38万トン、国内の価格が1万円を切ったという時にアメリカから確か2万4千円か何かで入れているんですよ。

だから、これは義務じゃなくて、いつでも何処の国でもやっていないんです。アクセスだから輸入の機会なんです。それを今迄、義務としてやってきたんだけど、これを農水省は初めて義務じゃないっていう答弁をしましたよ。だから今がチャンスなんです」

水島「そうですね」

山田（正）「ここで何とか鈴木さんを先頭に、ミニマム・アクセス、カレント・アクセスをやったら日本の米農家と畜産農家、酪農家は絶対に救えます」

水島「ああ、それは嬉しい、そういう言葉を聞きたいですからね、はい」

山田（正）「うん」

水島「分かりました」

山田（正）「私は、それだけ最後に」

水島「はい。葛城さん、じゃあ、最後に一言ずつ」

葛城「あ、はい。えーと、そうですね、何故、日本人が、こんなお金とか、それから外資とかグローバルとかに流されっぱなしになっちゃっているのかなあって考えた時、やっぱり日本人としての根っこが無い日本人になってしまっているせいじゃないかなあっていう風に、私は思ったんですね。

日本は、これだけ四季のある自然に恵まれた国で、本来、恵は足元に、いっぱいあるはずなんですけども、そこに目を向けなくて、例えば今日は水産の話にはなりませんでしたが、スーパーの魚売り場に行ってパッケージをひっくり返したら殆ど外国産のものなんですよね」

水島「うん、うん」

葛城「そういう方に飛びつくようになっちゃった国民の価値観をちゃんと変えていかないとならないと思ってまして、私は昨日、食に関する目から鱗体験をしたので、そのお話をさせて戴きたいと思います」

水島「うん」

葛城「雑穀を復活させようとして頑張ってもらってる大谷ゆみこさんっていう方の番組に出て、雑穀料理を戴きながらトークしたんです」

水島「雑穀っていうのは、あのう…」

葛城「粟とか、ひえとか」

水島「ひえとか粟とか、はい」

葛城「はい。コーリヤンとか」

水島「ああ、はい」

葛城「私、一口、食べてビックリしちゃって、最初に餅粟っていうのを食べたんですけども、粟にも、うるち粟と餅粟ってあるそうですね。餅粟っていうのはモチモチしていて、それがズッキーニとかカブの上にのっけられていたんですけど、一口、食べたら何か細胞が喜んでいていうぐらいパワーがある食材だったんですよ」

水島「なるほど、へえ～（笑）」

葛城「ちょっと、ええっと思って、何故、こんなにパワーのある食材が私達の意識から、もう消え去っていたんだろうって考えた時に、何故だと思えますかって質問したら、ひとつには、お米はちゃんと豊かな人が食べる食材だけど雑穀は貧しい人が食べるものみたいな印象があったこともあると思うけれども、それだけじゃなくて、やっぱり戦後、GHQ

とまでハッキリ言っていていいか分からないですけども、雑穀を作っていた岩手県のある農家が全部、捨てなさいっていう指令を受けたことがあったんですって。

それを考えたら、やっぱりアメリカからの圧力だった可能性もあるっておっしゃっていましたね。その話と鈴木さんが常々書いておられる、戦後、アメリカは自分達の売りたい小麦と大豆とトウモロコシを日本から駆逐するようにしていたっていう話と繋がって、日本は、本当に牛耳られているんだなあと。

価値観が変わっちゃって、正直、私も、ひえとか粟っていうと鳥の餌だとか、あとはお米にちょっと混ぜて炊くと確かに美味しいぐらいの印象しかなかったんですけど、本来、こんなにエネルギーがあって栄養も豊かな食材が、私達の意識から遠ざけられていたんだなあということに私自身も恥ずかしいなと思いましたし…」

水島「なるほどね」

葛城「そういったことって、いっぱいあるんじゃないかなって思ったんですよね」

水島「そうですねえ」

葛城「今日、山田（正）さんのお話を伺って、みつひかりの事は、とても衝撃的だったんですけども…」

山田（正）「みつひかりを刑事告発しようと思って、今、準備しているんだ。みんなで一緒にやりませんか」

葛城「いや、こんな大事なことを、日本国民が殆ど知らないっていうことは、何て異常な国家だっていうことを改めて思わされたんです」

水島「そうだねえ」

葛城「メディアも報道しないという。こういった事実をもっともっと広めて欲しいし、そういうことをされるんだったら、私も勿論、協力したいと思いますし、まず、知らないと始まらないので、こういった場を活用させて載いて…」

水島「そうだね」

葛城「正しい知識が、ちゃんと普及して日本人としての根っこが生えていくような社会を創っていきたいなあって思わせて戴きました」

水島「そうですね。いや、それと本当に、さっき言った、あの鯨のね…」

葛城「はい」

水島「ドキュメンタリーも米と本当に似ているところがあると思うね」

葛城「あ、そうですねえ」

水島「これ、考え方がね」

葛城「はい」

水島「自然を失っていると、こういう鯨に対する偏見とかね」

葛城「そうそう」

水島「イルカもそうだったけど太地町のね、あれ、そうですけどね」

葛城「八木監督は、鯨を食べなくなったのと、日本経済が没落していったのは完全に相似形だったという風に言っていましたね」

水島「そうだよ、う～ん」

葛城「学校給食で復活したらいいっていうのは、鯨も全く一緒だと思います」

水島「本当に、そうですよ」

山田（正）「餅栗って美味しいですよ」

葛城「ほんと感動しました。ああ、さすがに、ご存じですね（笑）」

山田（正）「（笑）」

水島「その五穀豊穡っていうのは、その中に、そういうのが入っているんだね」

葛城「正にそうだと思います」

水島「はい、お祈りしていますけど。では、鈴木（傾）さん、最後に一言」

鈴木（傾）「私も日本の米は大好きですけど、同時に、やっぱりインディカ米、東南アジアで食べられている米も好きですよ」

水島「あれ、美味しいですよ」

鈴木（傾）「美味しいですね」

水島「はい」

鈴木（傾）「それぞれ、その国にあった美味しさっていうのがあるはずですよ」

水島「うん」

鈴木（傾）「インドの米と東南アジアの米も似ているんですけど、やっぱり全然、違うんですよ。全く違うんです。やっぱり、その国の文化っていうものは食文化によって成り立っている訳で、じゃあ、これをグローバルで変えてしまうっていうのは、要するに食文化、まあ、食についても規格化、ひとつの規格化になってしまっている訳です」

水島「文化を無くしちゃおうっていうね」

鈴木（傾）「世界中の人々が、みんな、マクドナルドを食べればいいみたいな話になってしまいますけど、そうじゃなくて、ちゃんと、その国に昔からあった伝統、文化、そういったものを象徴する食べ物があって、それは守らなきゃいけないなという、まあ、そんなことを思っていますね」

水島「本当ですね。はい。有難うございます。では、折本さん、どうぞ」

折本「本当に、おっしゃるように、やっぱり農業っていうのは、もう産業ではなくて、我々の国体そのものだという風に思います。神話でも天照大神が瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）

と)に三種の神器と共に齋庭の稲穂を授けられて、この稲穂で大御宝である国民を豊かにしなさいという神勅を下されて、それで毎年、新嘗祭の時には天皇陛下が新穀を天照大神に捧げて一緒に召されていると。

私は以前、皇居の勤労奉仕に参加をしたこともありますけども、実際に齋庭殿(神嘉殿)を拝見する機会がございました。はい。そういうような形で正に本当に皇室を根幹とした我が国の伝統文化そのもので国体であると。ただ、それが結局、グローバル資本によって蹂躪されて、その外圧に自民党政権が結局、追従して国体をぶち壊すようなことをやっている。私は許し難い売国的な所業だという風に思っています。

そういった中で本来は民主的に、やはり、そういったコントロールをしていかなきゃいけないんですけども、残念ながら、やはり今の日本のそういう政治の中で民主主義が上手く機能していないという現状があって、例えば種子法ひとつとっても国会で議論しないで、結局、内閣の直属の諮問委員会とかで、よく素性も分からない得体の知れない、そういう民間議員とかが暗躍して、そうして法案を勝手に作って上意下達式に党議拘束をかけて一気に国会で通してしまうようなことをやっているの、民主主義が機能していないという状況だと思います。『農本主義』という思想がありますけれども、すみません、これも宣伝ばかりして恐縮ですけども…」

水島「いいですよ、はい」

折本「これは我々が出した本ですけども、戦前戦後にかけて橘孝三郎という農本主義の思想家がいました。5・15事件っていうのが1932年にありましたけども、あの時に決起した三上卓を始めとする青年将校と一緒に橘孝三郎という方は水戸で農業をやっていた方なんですけども、愛郷塾という塾を開いて、それで若者達と一緒に農業をやって、あとは農本主義を唱えて青年将校達に強い影響を与えた方ですね。

実際、5・15事件の時には海軍の三上卓を始めとする青年将校と共に愛郷塾の農民達が、農民決死隊というのを結成して、それで橘孝三郎も実際に5・15事件に参画しているんですね」

水島「うん」

折本「ただ別に政治家を暗殺しに行ったのではなくて、彼らがやったのは、変電所を爆破しようとしたと。じゃあ、爆破しようとしたのかと。まあ未遂に終わったんですが、物質文明の中心地である東京を数時間でも暗闇に出来たら、或いは人々が物質文明以上に重要な何かに気づくかもしれないという思いで変電所の爆破を企てたという、まあ、こういう方です。

この橘孝三郎が今年、生誕130年で没後50年ということで、先日、仲間で水戸に行ってお墓参りとかもしてきたんですけども、ただ、この5・15事件の時も結構、今と世相が似ている部分があるんじゃないかなあという風にも思っていて、例えば、三上卓が作詞した青年日本の歌というのがあります。その中で有名な一節があります。権門、上に傲れども国を憂う誠なしと」

水島「うん」

折本「財閥富を誇れども社稷を思う心なし、っていう一説がありますけど…」

水島「そうですね」

折本「正に今の日本のそういう世相を物語っているなど。ここに社稷という言葉が出てきましたけども、この土地の神、土地への信仰、そして農業を中心とした日本の国柄が根本的に壊されようとしている。それに対して、やはり我々が真剣にそうやって、何て言うんでしょうか、この国柄を取り戻していく為に立ち上がっていかないといけない。

だから農家の人も、やっぱり自分達は本当に、こういう惨い仕打ちを受けて、やはり国に対して怒って立ち上がらなきゃいけないし、我々は、そういう都市部の人も、そういう食に対する意識をちゃんと持って民主主義に参加していかなければいけないという風に思います。長くなって、すみませんでした」

水島「はい。どうも有難うございます。では、室伏さん、はい」

室伏「はい。僕は最初に、先程、葛城さんから雑穀の話が出たんですが、私は雑穀協会の雑穀エキスパートという者です」

葛城「あっ、そうだったんですか」

室伏「ええ。十数年前に取りました」

葛城「え〜〜っ！（笑）」

室伏「あの頃から雑穀はブームになり始めていたんですよ」

葛城「はい」

室伏「そうそう、そうそう」

葛城「なんと」

室伏「その時に取ってから、僕は色々な雑穀を買って食べています。むしろ、今、海外の方がオーガニックとか好きな人の方が食べているんです。使っていますね。だから海外の、例えばアメリカのオーガニックを扱っているホールフーズ・マーケットってあるじゃないですか。スーパーです。もう、そこだと量り売りしています」

葛城「ああ、そうなんですか」

室伏「日本の方が大分、昔に比べて安くなりましたけどもね」

葛城「へえ〜、何か砂糖も使わずにデザートも作れるっていうことも」

室伏「ああ、作れますね、はい」

葛城「食べさせて貰ってビックリして、はい」

室伏「私は、もっぱら食べるばかりですけど」

葛城「そうですか」

室伏「はい。すみません」

山田（正）「雑穀は、沖縄では島ごとに巫女さんが作って来たんだね」

葛城「へえ～～～」

水島「じゃあ、神様と繋がった食べ物ってということですね」

山田（正）「(頷く)」

葛城「そうですねえ。新嘗祭の時も備えていますもんね。はい」

室伏「はい、じゃあ、すみません、冒頭、その話をして最後に申し上げますけど、結局、今ね、皆さんが色んなこれからの方向性の話をしたので、改めて僕の側としては、いかに世論を変えていくのかと、印象を変えていくのかっていう観点からお話をしたいんですけど、例えば農業に関しては競争に晒せば強くなるって話があるとか。競争に晒せば、弱くなるって破壊されるはずなのに、そういう風になっていて日本の農家は守られ過ぎているから競争に晒せっていうことを平気で言ったりとかする人が居るんですよ。

でも未だに、そう信じ込んでいるお馬鹿さんって多いですよ。ここは変えなきゃいけないし、自由貿易を推進していれば、それを維持すれば、確実に日本には食糧が入って来るという風な根拠のない話を信じている人も居る。今の政府は、そういう考えで中国が駄目なら東南アジアにしようとか、そういう発想しかない。だから完全に間違いですよ。

だけでも自由貿易依存症っていうか、何だろうなあ、もう自由貿易っていう何か、こう、素晴らしいという前提で、もう日本って何でもかんでも語ろうとするところがあるので、これも、やっぱり変えなきゃいけない。実は、管理貿易ですよっていうことが解っていないので、しかも日本が貿易立国で、その貿易で日本のGDPがデカくなった、いやいや、日本っていうのはね、内需立国で、日本の外需依存度が20%を超えたことは戦後、ありません。十数パーセントになったのも小泉・竹中の時だけですと。後半ですね」

水島「うん」

室伏「だから、それも、やっぱり、ちゃんと知っていかなきゃいけないし、あとは最近、まあ、色々話したいことがありますけど、ちょっと端折っていきますけど、最近、去年ぐらいいかなあ、出た本で、農家はもっと少なくていいっていう本が出たんですね。僕は読んでいないんですけど、何か僕の周りが素晴らしいって絶賛して言っていたんですけど、結局それって、ある農業をやっている人が自分は儲かっているからいいんだと。

農家が少なくなったって、僕は、そういうところを買い取ってやるからいいんだっていう発想です。だから農家とか農業を見る時に、日本国内で今語られる話って結構ミクロの話になっちゃっているんですね」

水島「うん」

室伏「僕は儲かっているからいい。あそこの農家さんは儲かっているから、だから、いいじゃないかっていう話です。でも農業って、そういうものじゃないですよ」

水島「うん」

室伏「さっき折本さんも言っていた通り、産業じゃないんだからと。だから、やっぱり日本人って、そういう発想になってしまう。だからこそ、先程申し上げたように、外に売って来れば、そうすればいいじゃないかと。まだ、その努力が足りないんだという話をする

訳ですけど、そういったものには当て嵌まらないし、そういうものであってはいけなし、世界各国もそうやっていません」

水島「うん」

室伏「この事実をね、やっぱり、もっと僕は、そういう事実をどんどん発信していかなきゃいけないし、一緒にね、そういう発信をして、国民の意識を一人一人の意識を消費者の連帯とか話がありましたけど、変えていかないと、じゃあ、農家さんと一緒にやりましょうっていう話にならないと思いますから、それは、ちゃんとやっていかなきゃいけないなという風に思っています。

あとは、さっきのコオロギの話にしても何にしても、結局、全ての話がカーボン・ニュートラル云々に繋がっているんだらうなど。だから、あのインチキ話ってものをひっくり返さないと、あれによってコオロギがどうだとか水田はどうだとか、酪農はどうだっていう話になっちゃいますから、あとは、そのインチキを潰さないといけないよなど。

意外と意識高い系で、もう食糧、もったいないからフードロス無くそうとか言っている連中も、カーボン・ニュートラルの為にはってなっちゃうんで、貴方がやっていることを実現しようとする、そのカーボン・ニュートラルっていうものに対して、やっぱり懐疑的にならなきゃいけませんよっていう話だけど、これは何か絶対命令みたいになっちゃっているんですね。

でも、先程、ミニマム・アクセスは義務じゃないっておっしゃいましたけど、正に、それと同じように、カーボン・ニュートラルも別に義務じゃないっていうか、まあ、ある意味、インチキ嘘話ですから、ちょっと、そこは意識を変えていきましょうよと。各国ともそれぞれの事情に応じて、それぞれ勝手に解釈する訳ですから、日本もそれでやればいいじゃないですかということですよ。

最後にメッセージとして、これを、もう一回、出しますけども『農業を軽んじる国は、その民族の崩壊を招く、かつてローマが滅びたように』ということで、これを、まあ、かつてじゃないですけども、日本に置き換えれば『農業を軽んじる国は、その民族の崩壊を招く、そして日本が滅びる』と」

山田（俊）「大賛成！」

室伏「ほんとね、それを是非、皆さん、肝に銘じておいて戴きたいし、是非、ここもキャプチャーをとって拡散をしていって戴ければと思います」

水島「はい。では、鈴木（宣）さん、最後をお願いします」

鈴木（宣）「はい。皆さんのおっしゃる通りだと思います。先程、太陽光パネルの話がございましたが、太陽光パネルを張って、それによる再エネの事業者に対して払われている金額の総額は4.2兆円です。これは農業予算の2倍以上ですね。だから、このことだけ考えても、軍事、食糧、エネルギーが国家存立の3本柱というように世界的にも言う場合がありますが、その中でも一番の要である食糧が、これだけ予算的にも虐げられているというのは、日本の異常さを物語っているということで、皆さんからもお話があった通り日本の農業所得に占める補助金の割合は、せいぜい3割。

そして、フランスの小麦農家では、例えば235%です。酪農に至っては143%です。このようなぐらいの支援で各国は農業をしっかりと支えている。命を守り環境を守りコミュニティを守り、国土、国境を守っている産業、これは国が、国民が、みんなで支えるのが世界の常識だけでも、それが何かおかしいことかのように思われている日本というものが、いかに非常識かということ、今こそ、私達はきちんと情報共有しないといけない。

でも、じゃあ、例えば日本で今、お米の値段が下がってコストは上がって1俵3千円は、どうしても厳しいということだったら、政府が補填をしなければいけない。農水省が仮に決めたとしても。それに3千5百億円かかります。そうすると財務省が出て来て、そんな金が何処にあるのかと。いい加減に下さい。これでひと蹴りで終わりじゃないですか。

だから、この壁を乗り越える為の方策として、財務省の壁を打破して、農水省の予算の枠を超えて安全保障の為の食糧ということで、もっと10兆円規模のお金がついても、それが一番、真面目な事だということ、きちり認識して、そして、私が特に今提案しているのは食糧安全保障推進法というもので、これは民主党政権の時の山田大臣の時に出されたような戸別所得補償のような仕組みですが、それを食糧安全保障推進基礎支払いってということで、農家だけを助けるという意味合いをもっと超えて、国民全体が自分の命を守り支え合う為の基礎支払いであるということ、位置付けて、こういう支払いがきちんと支払えるような法律を超党派の議員立法で作れないかという話を今、しましたところ、山田俊男先生が幹事長をしておられる協同組合議員連盟で、それを具体化できないかという話をしてくれております。

それから自民党の101人居る積極財政議員連盟でもお話をしましたら、いや、これまで積極財政って言うと、農業の事はあまり言っていなかったけど、農業こそ積極財政、今、やらなきゃいけないんじゃないかということで、皆さんが意志統一をしてくれました。国会議員も一人で戦えば潰されますが101人も居れば、皆さん、頑張ってくださいと、101人で攻めれば、何人かは生き残れるかもしれません。ということまで言っているぐらい、こういう風な意識と、それから国会議員の皆さんの中にも、こういう流れをつくっていかねばいけないっていう、そういう、そんな流れが今、出てきておりますので、私は、こういう風なチャンスだなと。それを何とか実現していきたい、いければ変えられると思います。

それから、最後に、もう一言、今、本当に食糧危機、農業危機、更に厳しくなっていますが、今、本当に日本に農林水産業があって地域で農家の皆さんが頑張ってくれている。これこそが希望の光で、未来を創るんだという気持ちは、国民の中に間違いなく高まって来ていると思います。世界で一番、過保護だなんて嘘をつかれて、本当は一番、競争に晒されても、ここまで踏ん張って生き残ってきた農家の皆さん、正に精鋭ですよ。

それで、今でも世界で10位の農業生産額も誇っている訳ですよ。もっと私達は誇りと自信を持とうと。そして江戸時代には世界に冠たる循環農業で、世界の先端を走っていた訳ですからね。それだけの底力を、是非、今こそ発揮して農家も頑張ると。そして、だから国民もついて来てくれと。一緒に作って一緒に食べよう。こういうネットワークを作って、これから日本を、しっかりと未来が開けるように、みんなでしていこうじゃないか。こういう流れを、是非、私達のみんなの力で広げていきたいなという風に思っています」

水島「はい。鈴木（宣）さん、どうも有難うございます」

一同「(拍手)」

水島「はい。というようなことで、今日は『壊滅に進む日本農業と危機の食糧安保』ということで、皆様のご意見を伺いました。今、鈴木（宣）さんが最後、纏めてくれたんですけどね、まあ、そういうことで、我々は希望を失うことは無いと。本当にやる気のある人が一人居れば、ゼロと1は違う。一人一人がゼロから1、一人になっていくっていうことで、もう一つは、最後に言ってくれた、農民の皆さんっていうかね、酪農をやっている人、漁業をやっている人もそうですけど、こういう人達への敬意と、そして連帯ですね。こういうものを日本人としてやっていければと思います。

嬉しかったのは先日、6日に秋篠宮悠仁親王殿下が17歳のお誕生日をお迎えになりました。ご趣味というか一番、学問の関心をもっているのは農業だということですね」

山田（俊）「ああ、そう」

水島「それも稲作についての研究っていうねえ」

山田（俊）「ああ、いいねえ」

水島「聞いて、本当に嬉しかったなあ。正に皇室の王道を進まれているのかなあと思いました。というようなことで、今日は以上でございます。有難うございました」

一同「有難うございました」

\*\*\*\*\* お わ り \*\*\*\*\*